

仙台市文化財調査報告書第367集

下ノ内浦遺跡

第7次発掘調査報告書

2010年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政につきまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。

市内には、旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が遺っております。当教育委員会といたしましても、先人の貴重な文化遺産を保護し、保存・活用を図りながら、次の世代に継承していけるよう努めているところであります。

下ノ内浦遺跡は J R 長町駅の南西約 1.5km、仙台市体育館の東側に位置しており、昭和 58 年の高速鉄道南北線関係遺跡の発掘調査から平成 13 年のマンション建築工事に伴う発掘調査まで、6 次にわたる調査が実施されています。調査の結果、縄文時代から近世までの遺構・遺物が発見され、縄文時代以降の継続的な生活痕跡が残されている遺跡であることが明らかになっています。特に昭和 58～59 年に行われた調査では、縄文時代早期の仙台市内最古の竪穴住居跡や、縄文時代後期の配石墓群等が発見されています。

今回の調査は、マンション建築工事に伴うもので、本報告書は発掘調査の成果についてまとめたものです。調査では、古代の竪穴住居跡や土坑、溝跡と縄文時代および弥生時代の遺物包含層が検出され、縄文土器や弥生土器、土師器、石器等が出土しています。

当教育委員会におきましては、発掘調査状況の公開・活用を進めるため、調査の概要を紹介する広報板等への掲示や遺跡見学会の開催など、今後もより多くの市民の皆様に興味をもっていただけるような活動を行っていきたいと考えております。今回の調査成果が地域の歴史を解き明かしていくための貴重な資料となり、多くの方々に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に際しまして、ご指導、ご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げます、序といたします。

平成 22 年 3 月

仙台市教育委員会
教育長 荒井 崇

例 言

1. 本書は共同住宅建築工事に伴い実施された、下ノ内浦遺跡第7次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会の委託を受け、株式会社四門仙台支店が行なった。
3. 本書の作成は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 荒井格・熊谷敏哉の監理のもとに、株式会社四門仙台支店 三澤壯太・百瀬貴子が担当した。
4. 本書は、第1章を熊谷、第2～4章、第5章第1・2・4～6節、第6章1・2節を三澤、第5章第3節、第6章3～7節を百瀬が執筆した。
5. 調査及び報告書作成にあたり、下記のデジタル機器・ソフトウェアを使用した。

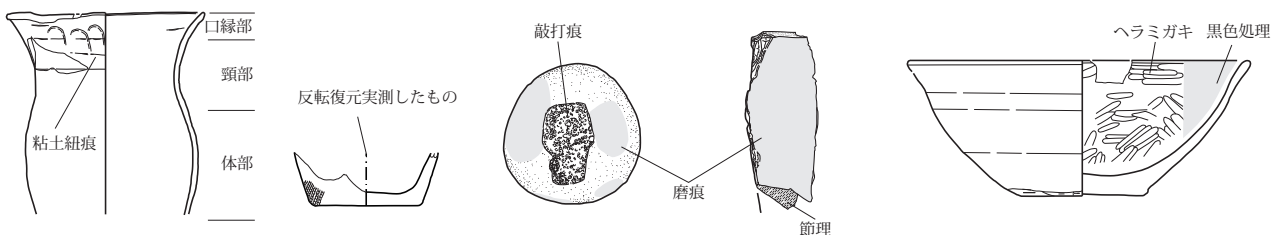
測量・遺構計測	WingNeo	(アイサンテクノロジー株式会社)
	遺構くん	(株式会社 CUBIC)
遺構図・遺物実測図編集	Photoshop・Illustrator	(Adobesystems)
報告書編集・作成	InDesign	(Adobesystems)
	Word・Excel	(Microsoft)
6. 石器の石材鑑定は、東北大学名誉教授 蟹澤聰史氏にお願いした。
7. 本調査の実施及び報告書の作成に際し、野村不動産株式会社仙台支店・中外機工株式会社・株式会社マルヨシ興業よりさまざまな御協力を賜った。記して謝意を表す次第である。
8. 発掘調査に関わる一切の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本書の土色は、新版標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局 2001年版）に準拠している。
2. 本書中の第1章第1図は国土院発行の5万分の1地形図「仙台」を使用した。
3. 図中のグリッド値は、日本測地系座標を使用し X=-198119.0 m、Y=3772.0 mを起点 (A1)、X=-198148.0 m、Y=3791.0 mを終点 (T30) として 1 m間隔で設定し、東西をアルファベット、南北を数字で表記した。
4. 本文・図版等で使用した方位は、すべて座標北を基準としている。
5. 標高値は、海拔高度 (T.P) を示す。
6. 遺構図は、縮尺 1/60 を基本とした。その他、各図内にスケールを示した。
7. 基本層の表記は盛土層を除きローマ数字を用いた。
8. 遺構名の略号は、SI：竪穴住居跡・竪穴遺構、SD：溝跡、SK：土坑、SR：自然流路、P：ピットを使用した。なお遺構図内で略号のない遺構番号はピットをあらわす。
9. 調査区・遺構の面積は、測量用ソフトを使用して算出した。
10. 遺構の主軸方位は、長軸および長軸と想定される方位を主軸方位とした。
11. 竪穴住居跡の断面図では、床面及びカマド使用面は太線とし、掘り方は細線とした。
12. 遺物の登録・整理及び報告書での表示には、以下の分類と略号を使用した。

A：縄文土器、B：弥生土器、C：土師器 (非ロクロ調整)、D：土師器 (ロクロ調整)、K：石器・石製品
13. 遺構平面図・断面図中では、遺物を以下の略号を用いて表記した。

P：土器、S：石
14. 遺物実測図は、原則として土器 1/3、石器 1/1、2/3、1/2、1/3 で表示した。その他、各図内にスケールを示した。
15. 遺物実測図において、外形線・中心線・稜線は実線、推定線は破線で表した。中心線が一点鎖線のものは、転回して図上復元したものである。内面黒色処理を施したものについては、一部にトーンをかけた。



遺物実測図の表現と部位名称

目 次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	1
第2章 遺跡の立地と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第3章 調査の方法と経過	2
第1節 調査区の設定	3
第2節 調査の方法	3
第3節 調査の経過	3
第4章 基本層序	4
第5章 検出遺構と出土遺物	4
第1節 III a層上面遺構と出土遺物	4
第2節 III b層上面遺構	15
第3節 III層出土遺物	15
第4節 IV層上面遺構と出土遺物	26
第5節 V層上面遺構と出土遺物	28
第6節 VI層上面遺構	29
第6章 まとめ	29

挿 図 目 次

第 1 図 下ノ内浦遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第 2 図 下ノ内浦遺跡第7次調査区位置図	3
第 3 図 調査区北壁・東壁土層断面図	5
第 4 図 III a層上面検出遺構 遺構配置図	6
第 5 図 SI1 竪穴遺構 平面図・土層断面図	7
第 6 図 SI2 竪穴住居跡 平面図・土層断面図	7
第 7 図 SI3 竪穴住居跡 平面図・土層断面図・出土遺物	9
第 8 図 III a層上面検出溝跡・土坑 土層断面図	10
第 9 図 III a層上面検出溝跡 平面図・土層断面図・出土遺物	10
第10図 調査区北側部分III a層上面検出溝跡 平面図・土層断面図	11
第11図 SD26 溝跡出土遺物	12
第12図 III a層上面検出土坑 平面図・土層断面図	13
第13図 SK13・19 土坑出土遺物	14
第14図 III b層上面検出遺構 遺構配置図	15
第15図 III b層上面検出土坑 平面図・土層断面図	15
第16図 弥生土器①	17
第17図 弥生土器②	18

第 18 図	弥生土器③	19
第 19 図	弥生土器④	21
第 20 図	弥生土器⑤	22
第 21 図	石器①	23
第 22 図	石器②	24
第 23 図	石器③	25
第 24 図	SD41 溝跡 土層断面図・出土遺物	26
第 25 図	IV・VI層上面遺構 遺構配置図	27
第 26 図	SK17・18 土坑 平面図・土層断面図	28
第 27 図	V層出土遺物	28

表 目 次

第 1 表	Ⅲ a 層上面遺構 SI1 竪穴遺構, SI2・3 竪穴住居跡 計測表	30
第 2 表	Ⅲ a 層上面遺構 SD1～40 溝跡 計測表	30
第 3 表	Ⅲ a 層上面遺構 SK1～15・19～21 土坑 計測表	31
第 4 表	Ⅲ b 層上面遺構 SK16・22 土坑 計測表	31
第 5 表	IV層上面遺構 SD41 溝跡 計測表	31
第 6 表	IV層上面遺構 SK17・18 土坑 計測表	31
第 7 表	出土土器・土製品数量表	31
第 8 表	層位・遺構別出土石器数量表	32
第 9 表	石材別出土石器数量表	32

図 版 目 次

写真図版 1	Ⅲ a 層上面遺構	35
写真図版 2	Ⅲ a 層上面遺構・Ⅲ b 層上面遺構	36
写真図版 3	Ⅲ a～d・IV～VI層上面遺構	37
写真図版 4	縄文土器・弥生土器 (第 I 類・第 II 類)	38
写真図版 5	弥生土器	39
写真図版 6	石器・土師器	40

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成21年5月11日付けで、野村不動産株式会社仙台支店長横山英大氏より、仙台市太白区長町南四丁目29-3、29-6、29-7について、共同住宅建築工事に係る「埋蔵文化財発掘の取り扱いについて（協議）」が提出された。

当該地は、下ノ内浦遺跡の中央やや北東寄りに位置している。平成21年6月1日～11日に4箇所のトレンチを設定し、確認調査を実施した。その結果、溝跡4条、土坑1基、ピット50が検出された。さらに縄文土器片や弥生土器片が出土し、縄文時代および弥生時代の遺物包含層の存在も確認された。このことから、共同住宅建築工事により地下遺構が損なわれると判断し、工事に先立って本発掘調査が必要である旨の回答を通知した。その後、幾度かの協議を経て、記録保存を図るための発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査要項

遺跡名称	下ノ内浦遺跡（宮城県遺跡地名登録番号01368・仙台市文化財登録C-300）		
所在地	宮城県仙台市太白区長町南四丁目29-3、29-6、29-7		
調査原因	共同住宅建築工事に伴う埋蔵文化財の事前調査		
調査主体	仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課）		
調査担当	調査係主査	荒井 格	
	調査係文化財教諭	熊谷 敏哉	
	主任調査員	三澤 壮太（株式会社四門 仙台支店）	
	調査補助員	百瀬 貴子（株式会社四門 仙台支店）	
	計測員	小山 一美・島田 亘・栢田 宜弘（株式会社四門 仙台支店）	
調査期間	平成21年8月19日～平成21年10月30日		
調査面積	399㎡		

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

下ノ内浦遺跡は仙台市太白区長町南に所在し、JR長町駅の南西約1.5km、仙台市体育館の東約150mに位置する（第1図）。遺跡の南方約1kmに名取川が流れており、東方約3.2kmには名取川と広瀬川の合流点がある。遺跡周辺は名取川と広瀬川にはさまれた「郡山低地」と呼ばれる地域にあたり、太白山北麓を源とする笹川が名取川寄りを曲流している。郡山低地の基盤は名取川と広瀬川の供給した礫層であるが、その後の堆積状況は場所により異なっている。

本遺跡は、名取川と笹川の洪水堆積物によって形成された自然堤防上に立地する。遺跡は東西約400m、南北約120mに広がっており、面積は約3haと推定される。現在の標高は11～12mである。

第2節 歴史的環境

本遺跡では、これまで6次の調査が実施されており、縄文時代から近世までの遺構、遺物が検出されている（第2図）。縄文時代では、市内で最も古い早期前半の竪穴住居跡と、後期の配石遺構・墓壙等で構成される墓域等が確認されている。弥生時代では後期の遺物包含層と土壇墓が検出され、墓域であったことが判明している。また弥生時代後期から古墳時代前半の水田跡や、古墳時代から平安時代初め頃の畑跡等の食糧生産に関わる遺構も確認されている。奈良・平安時代では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が発見されており、居住域であったことが明らかになっている。



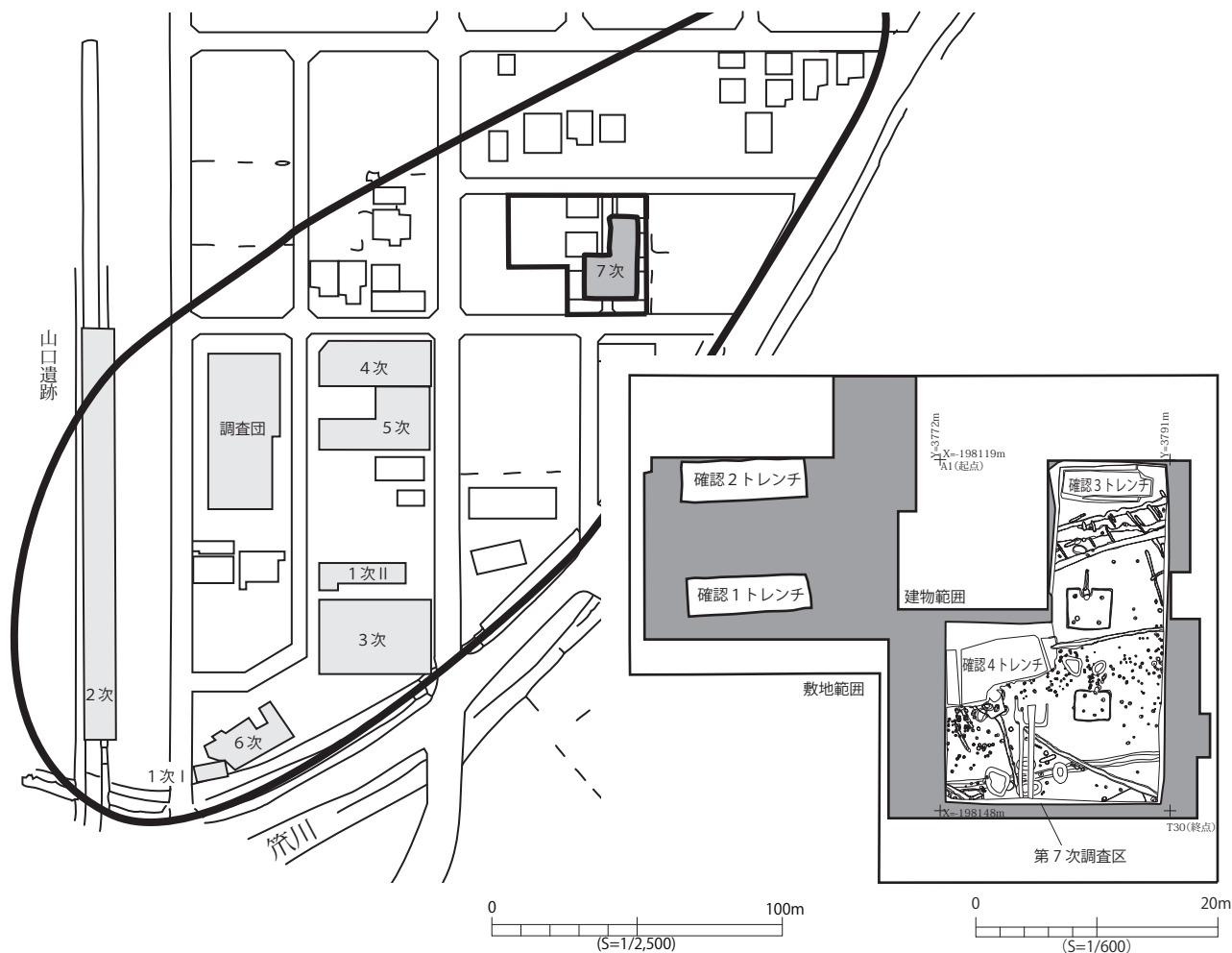
番号	遺跡名	立地	時代	番号	遺跡名	立地	時代
1	下ノ内浦遺跡	自然堤防	縄文～平安	11	元袋遺跡	自然堤防	奈良・平安
2	山口遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文・弥生・奈良・平安	12	袋東遺跡	自然堤防	古墳・平安
3	富沢遺跡	後背湿地	旧石器・縄文～近世	13	三神峯遺跡	段丘	縄文
4	下ノ内遺跡	自然堤防	縄文～平安	14	上野遺跡	段丘	縄文・奈良・平安
5	六反田遺跡	自然堤防	縄文～平安	15	大野田官衙遺跡	自然堤防	奈良
6	伊古田遺跡	自然堤防	縄文～平安	16	長町駅東遺跡	自然堤防	弥生・古墳末・奈良初
7	泉崎浦遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文・奈良・平安	17	西台畑遺跡	自然堤防	縄文・弥生中・古墳
8	大野田古墳群	自然堤防・後背湿地	縄文～中世	18	郡山遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文・古墳～中世
9	王ノ壇遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文～中世	19	遠見塚古墳	自然堤防	古墳
10	大野田遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文・弥生	20	南小泉遺跡	自然堤防	縄文～近世

第1図 下ノ内浦遺跡の位置と周辺の遺跡

本遺跡の北側には約2万年前の旧石器時代の森林跡や焼き火跡が発見された富沢遺跡があり、焼き火の近くでは石器製作が行われていた。周辺では、山口遺跡、六反田遺跡、下ノ内遺跡、袋東遺跡、伊古田遺跡などが知られており、縄文時代から近世の居住域、生産域、墓域等に関わる多くの遺構が検出されている（第1図）。

第3章 調査の方法と経過

今回の調査は共同住宅建築工事に伴う事前調査である。調査対象地の現状は、確認調査終了後に4箇所のトレンチが埋め戻され、更地となっている。



第2図 下ノ内浦遺跡第7次調査区位置図

第1節 調査区の設定

調査区は、確認調査で縄文時代と弥生時代の遺物包含層が確認された3トレンチと4トレンチを中心として、建物建設予定範囲の東側部分に設定することとした。事業主担当者および仙台市職員の立会のもと、事業主手配による測量士が建物範囲の位置出しを行い、それを基準として調査区を設定した。調査面積は399㎡である。

グリッドの設定は、日本測地系第X系の座標を使用して、X=-198119.0 m、Y=3772.0 mを起点、X=-198148.0 m、Y=3791.0 mを終点として行った。調査区北西にあたる起点をA1とし、東西をアルファベット、南北を数字で表記した(第2図)。

第2節 調査の方法

盛土と盛土以前の旧表土、確認調査トレンチの埋め戻し土、および無遺物層であるIV層の除去には重機を使用した。遺物包含層のⅢa～Ⅲd層とV層については、調査範囲を1m四方のグリッドに分割し、人力によって掘り下げた。遺物包含層の調査においては、グリッド・層位ごとに遺物の取り上げを行った。

図面の作製は、平面図及び地形測量はトータルステーションによる三次元計測によって行い、土層断面図・遺物出土状況微細図などは手描き図面と写真実測を併用した。写真撮影は35mmリバーサルフィルム・モノクロフィルム及びデジタルカメラを使用した。調査区全景写真の撮影には、高所作業車と脚立を使用した。

第3節 調査の経過

調査区設定を8月19日に行い、同日、重機による盛土・旧表土の掘削を開始した。8月20日から基本層Ⅲa層上面で遺構検出作業を行った。Ⅲa層上面検出遺構の調査を終えた後、下層のⅢb～Ⅲd層およびⅣa層の各

層上面で遺構の検出、調査を随時行いながら、調査区全面を掘り下げた。10月19日にIV層を重機で除去し、V層上面で遺構の有無を確認した後、V層を人力により掘り下げ、VI層上面で検出された遺構の調査を行った。10月29日に高所作業車による調査区全景の写真撮影を行い、10月30日に撤収し、すべての現地調査を終了した。

第4章 基本層序

基本層は、大別6層に分かれる。I層とIV層は2層、III層は4層に細分される(第3図)。

I層：I a層(層厚20～30cm) 10YR4/1 褐灰色	粘土	近世以降の水田耕作土
I b層(層厚0～40cm) 10YR6/1 褐灰色	シルト質粘土	近世以降の水田耕作土
II層(層厚0～20cm) 10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	近世以降の水田耕作土
III層：III c層は調査区のほぼ全域で検出されたが、他の細分層は部分的な分布である。		
III a層(層厚0～25cm) 10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	弥生時代遺物包含層
III b層(層厚0～20cm) 10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	弥生時代遺物包含層
III c層(層厚10～20cm) 10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	弥生時代遺物包含層
III d層(層厚0～35cm) 5B4/1 灰黄褐色	粗砂	弥生時代遺物包含層
IV層：IV a層(層厚5～40cm) 10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	無遺物層
IV b層(層厚0～25cm) 10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	風化礫を含む無遺物層
V層(層厚5～30cm) 10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	縄文時代遺物包含層
VI層(層厚40cm以上) 10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	

第5章 検出遺構と出土遺物

遺構は、III a層上面、III b層上面、IV層上面、V層上面、VI層上面で検出された。検出遺構は、竪穴住居跡2軒、竪穴遺構1基、溝跡35条、土坑18基、自然流路跡1条、ピット340で、総数は397である。

遺物は、検出遺構内とIII層(弥生時代遺物包含層)、V層(縄文時代遺物包含層)から出土している。出土遺物の点数は、縄文土器片132点、弥生土器片4,443点、非ロクロ調整の土師器片77点、ロクロ調整の土師器片10点、調整不明の土師器片25点、不明土製品5点、礫石器7点、打製石器112点、剥片206点、軽石4点、礫14点、珪化木6点の総数5,041点である。

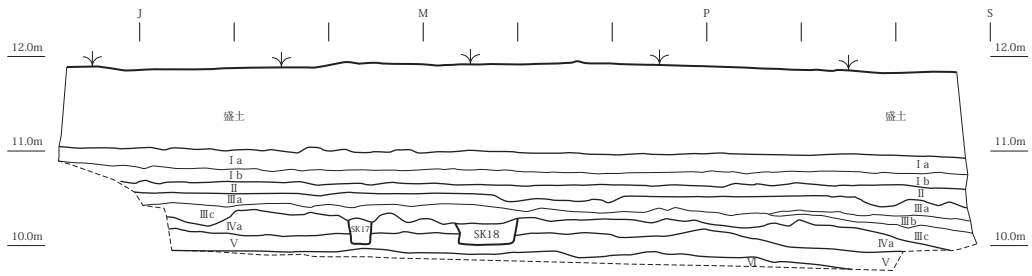
第1節 III a層上面遺構と出土遺物

III a層上面の遺構は竪穴住居跡2軒、竪穴遺構1基、溝跡33条、土坑13基、ピット248の合計297である(第4図)。

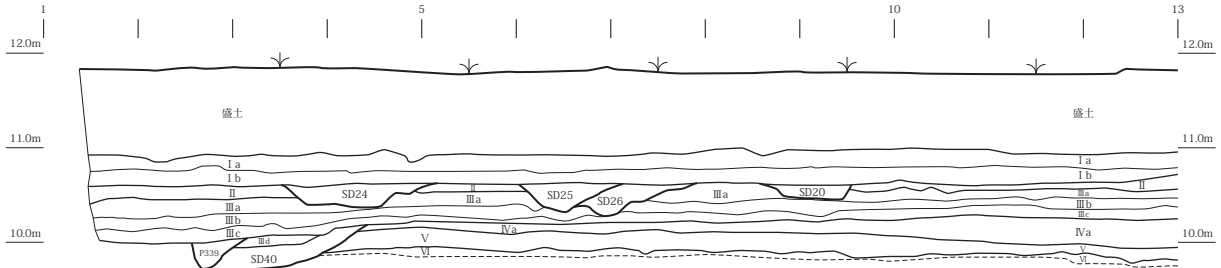
1. 竪穴住居跡・竪穴遺構

SI2、SI3はカマドを有する竪穴住居跡であるが、遺構堆積土とIII a層・III b層の層相が類似していたため明確に判別できず、III c層での検出となった。III層が弥生時代の遺物包含層であることから、III a層より上からの掘り込みと判断されるため、第4図のIII a層上面遺構の配置図に掲載した。

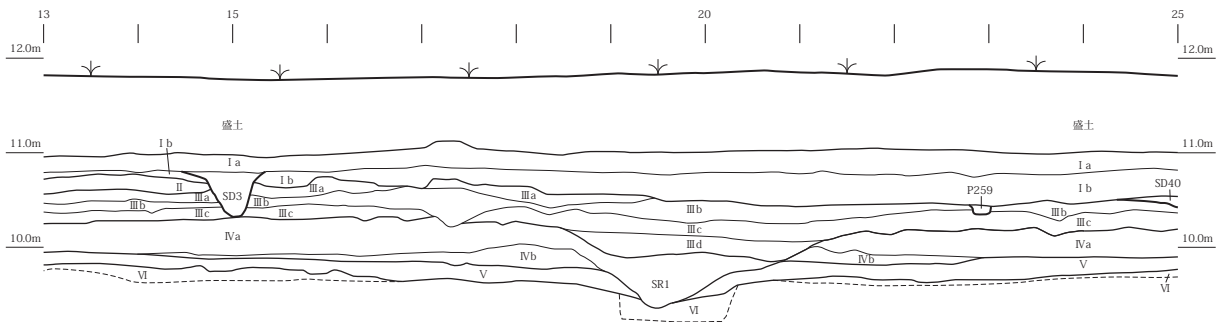
SI1 竪穴遺構(第5図) 調査区南東部で遺構の一部が検出された。大部分は調査区外の南側に延びるものである。北東隅をSD2溝跡に切られる。竪穴住居跡の北東隅部分と考えられるが、調査区内でカマドや柱穴、周溝等は確認されなかったことから、竪穴遺構として報告する。平面形は方形と推定される。調査区内で確認された規模は、北辺部分3.11m、東辺部分1.15mである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、最も良好に残存している東側で27cmである。方向は東壁でN - 25° - Wである。床面は平坦で、貼床や硬化面は確認されなかった。堆積土は3層に分けられる。



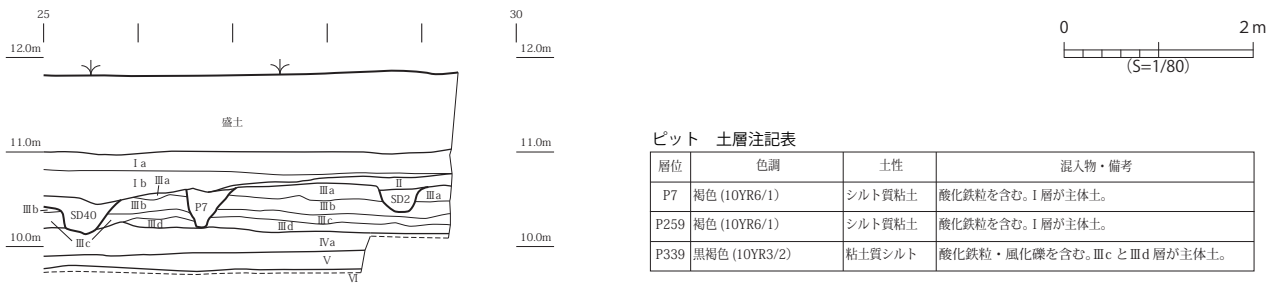
調査区北壁土層断面図



調査区東壁土層断面図①



調査区東壁土層断面図②



調査区東壁土層断面図③

ピット 土層注記表

層位	色調	土性	混入物・備考
P7	褐色 (10YR6/1)	シルト質粘土	酸化鉄粒を含む。I層が主体土。
P259	褐色 (10YR6/1)	シルト質粘土	酸化鉄粒を含む。I層が主体土。
P339	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	酸化鉄粒・風化礫を含む。III c と III d 層が主体土。

調査区北壁・東壁土層断面図 土層注記表

層位	色調	土性	混入物・備考
I a	褐灰色 (10YR4/1)	粘土	下部に酸化鉄を多く集積する。現代の水田耕作層。
I b	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	下部に酸化鉄を多く集積する。現代の水田耕作層。
II	褐灰色 (10YR 5/1)	粘土質シルト	上部にマンガン粒を多く含む。
III a	黒褐色 (10YR3/2)	シルト質粘土	酸化鉄粒・風化礫を含む。調査区全域に認められる。
III b	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	粘土粒・粘土ブロック・風化礫を含む。
III c	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	粘土ブロック・砂質シルト・粗砂・風化礫を含む。調査区全域に認められる。

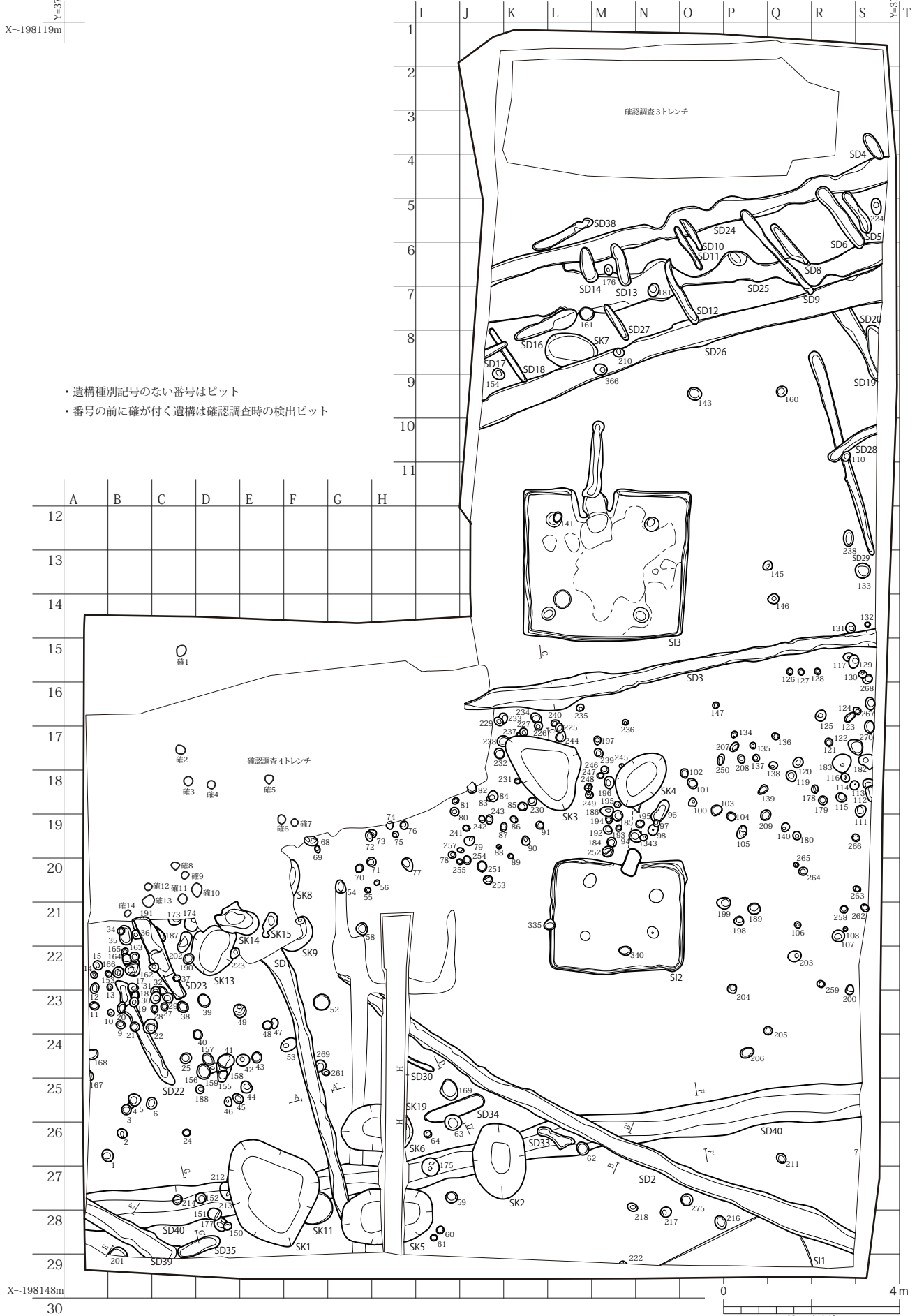
層位	色調	土性	混入物・備考
III d	灰黄褐色 (5B4/1)	粗砂	風化礫を多く、粘土質シルトを少量含む。
IV a	にふい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	粘土粒・酸化鉄粒を含む。調査区全域に認められる。
IV b	にふい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	粘土質シルト・酸化鉄粒・風化礫を含む。
V	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	調査区全域に認められる。
VI	にふい黄褐色 (10YR5/3)	砂質シルト	酸化鉄ブロックを含む。調査区全域に認められる。

第3図 調査区北壁・東壁土層断面図 (1/80)

X=198119m
Y=3772m

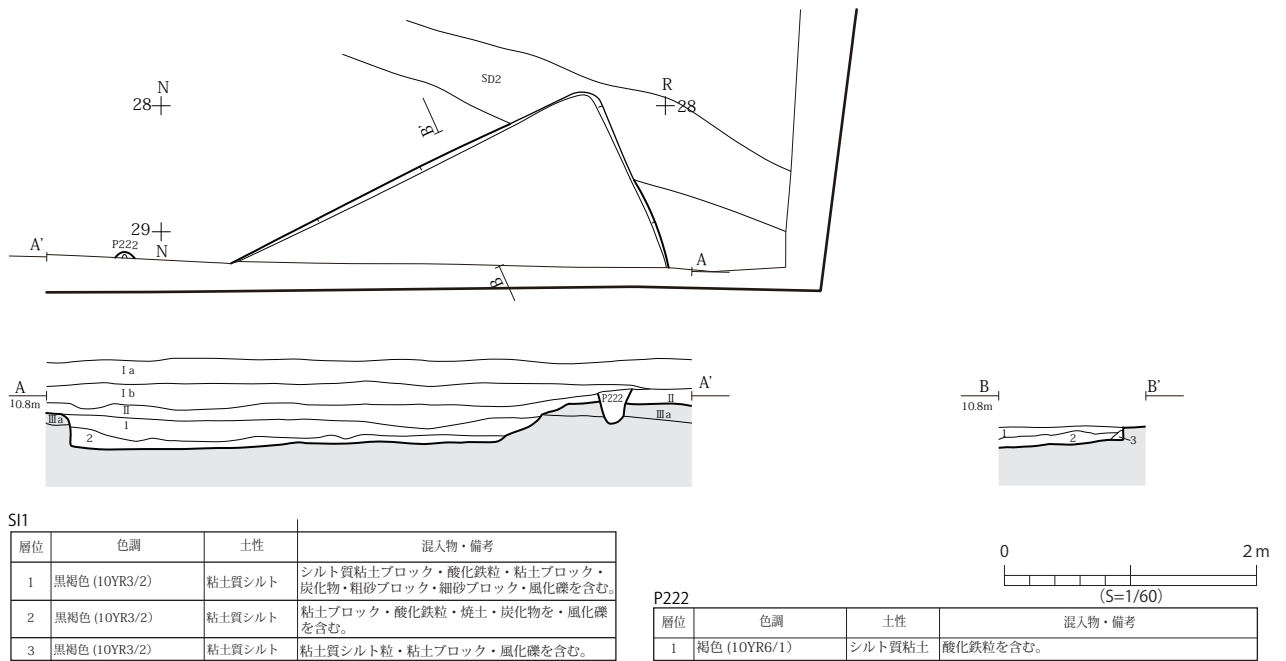
Y=3791m

- ・遺構種別記号のない番号はビット
- ・番号の前に確が付く遺構は確認調査時の検出ビット

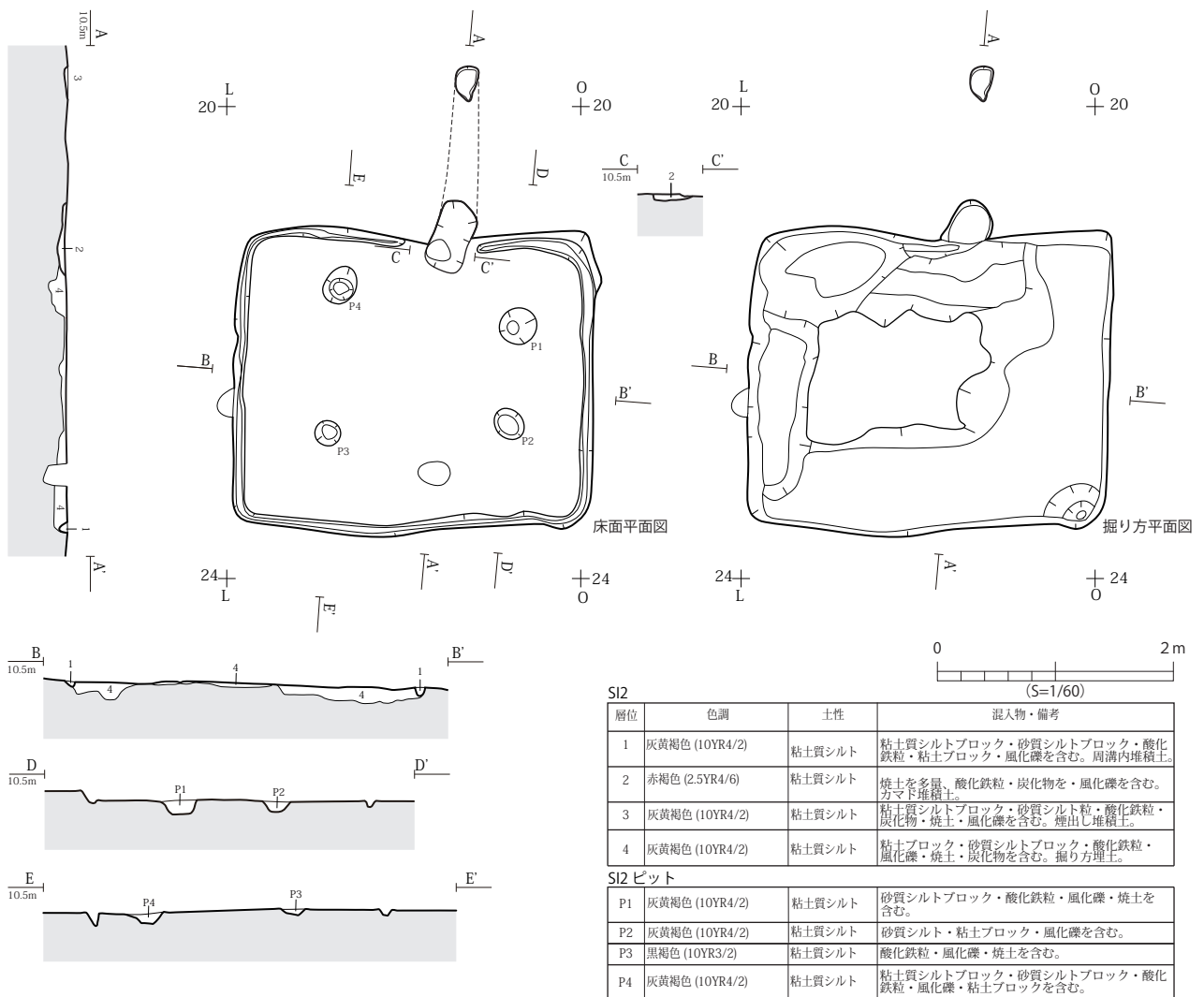


第4図 IIIa層上面検出遺構 遺構配置図 (1/120)

(S=1/120)



第5図 SI1 竪穴遺構 平面図・土層断面図 (1/60)



第6図 SI2 竪穴住居跡 平面図・土層断面図 (1/60)

底面直上の出土遺物はない。堆積土中から弥生土器 50 点、非ロクロ調整の土師器 4 点、調整不明の土師器片 1 点、軽石 1 点、炭化物片 1 点が出土している。いずれも小破片のため図化していない。

SI2 竪穴住居跡（第 6 図） 調査区中央南寄りで確認された。P335 と 340 に切られる。Ⅲ b 層を掘り下げⅢ c 層を検出する過程で確認したため、北東部分を除き、床面を少し削平した状態での検出となった。平面形は南北 2.52m、東西 3.02m の方形であり、北壁中央やや東寄りにカマドが敷設されている。方向は東壁で N - 3° - E である。壁高は最も残存している北東隅で 10cm を測る。床面は全面貼床されているが、硬化面は確認されなかった。支柱穴は 4 基検出されたが柱痕跡は確認されなかった。周溝はカマド部分を除き、ほぼ全周しており、幅 9 ~ 24cm、深さ 7cm で、U 字状の断面形を呈する。カマドは燃烧部と煙道部煙出しのピットを確認した。検出した時点ではカマド袖部分は既に失われ、火床面のみが残存していた。燃烧部は幅 30cm、奥行き 60cm の方形である。煙出しの一部と考えられるピットは、北壁から 87cm 離れた燃烧部北側の位置で確認された。平面形は不整形を呈し、残存値は長軸 28cm、短軸 20cm、深さ 3cm である。住居跡の堆積土は 3 層に分かれる。1 層は周溝内堆積土、2 層はカマド内堆積土、3 層は煙道内堆積土である。4 層は掘り方埋土であり、掘り方はカマド前面から中央部分を残して掘り込まれている。

遺物は、堆積土から非ロクロ調整の土師器片 1 点、周溝堆積土から弥生土器片 1 点、掘り方埋土から非ロクロ調整の土師器片 4 点、弥生土器片 28 点、石核、打製石器、剥片各 1 点が出土している。このうち掘り方埋土から出土した弥生土器片 4 点を図化した（第 17 図 11、第 18 図 5、第 19 図 11・16）。これら弥生土器の詳細については第 3 節にまとめて報告する。

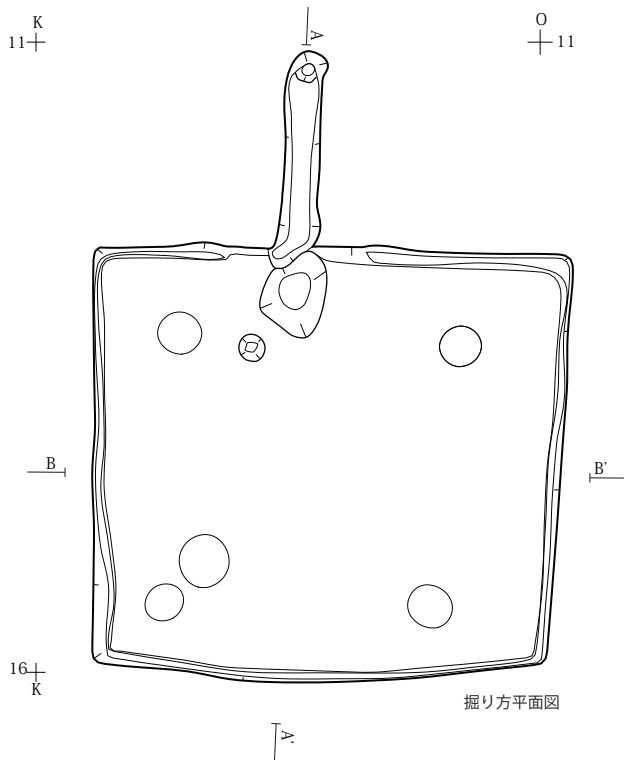
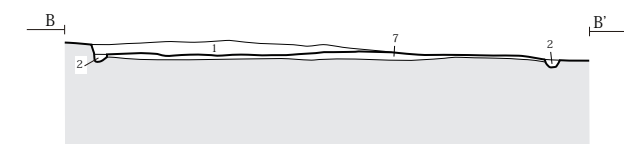
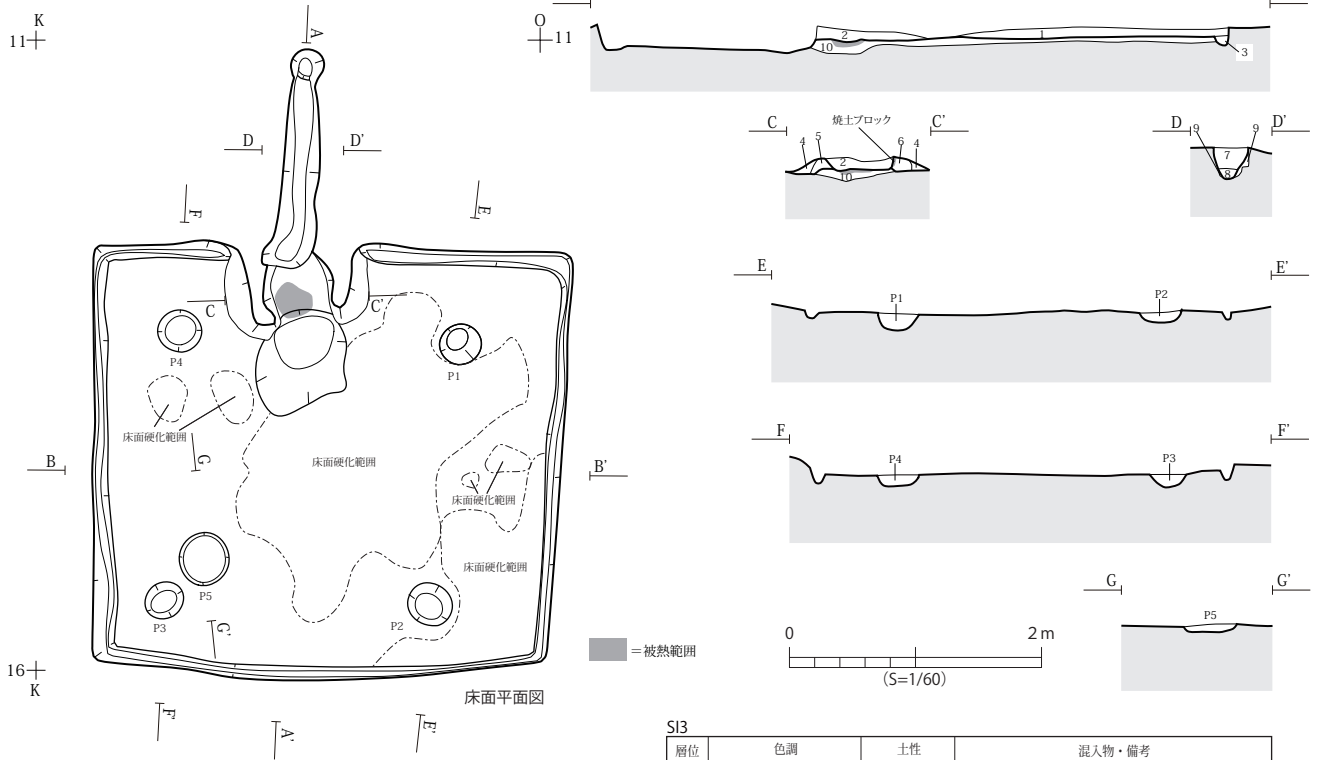
なお、SI2 竪穴住居跡では時期を特定できる遺物の出土はないが、東側の辺が SI3 竪穴住居跡の東側の辺とほぼ同方向を向き、ほぼ同一線上に並ぶことから、SI3 と同時期の遺構である可能性が考えられる。

SI3 竪穴住居跡（第 7 図） 調査区中央北寄りで確認された。P141 に切られる。Ⅲ b 層を掘り下げ、Ⅲ c 層を検出する過程で確認したため、西側では住居壁と堆積土が残存していたが、東側は床面での検出となった。平面形は方形で、規模は南北 3.30m、東西 3.61m である。方向は東壁で N - 5° - W である。壁高は最も残存している西壁中央で 15cm を測る。床面は全面貼床されており、中央から東側にかけて、周辺よりも硬化した範囲が確認された。床面では支柱穴を含むピットが 5 基検出されたが柱痕跡は確認されなかった。周溝はカマド部分を除きほぼ全周して確認された。幅 6 ~ 20cm、深さ 13cm で U 字状の断面形である。カマドは北壁中央やや西寄りに敷設されており、燃烧部および煙道部が確認された。煙道部の先端はピット状である。カマド前面に浅い窪みがある。燃烧部は幅 43cm、奥行き 80cm で、煙道部は幅 30cm、長さ 167cm である。住居跡の堆積土は 6 層に分かれる。1 層は住居内堆積土、2 層はカマド内堆積土、3 層は周溝内堆積土、4 ~ 6 層はカマド構築土、7・8 層は煙道内堆積土、9 層は煙道掘り方埋土、10 層は掘り方埋土である。掘り方は全体的に掘り下げられ、特にカマド燃烧部下を深く掘り窪めている。

カマドの堆積土からロクロ調整の土師器片 4 点、調整不明の土師器片 3 点、剥片 2 点、炭化物片 1 点、弥生土器片 2 点が出土している。他に、床面直上から弥生土器片 6 点、煙道部から弥生土器片 1 点、剥片石器 1 点、住居内堆積土から非ロクロ調整の土師器片 2 点、ロクロ調整の土師器片と調整不明の土師器片各 1 点、弥生土器片 25 点、剥片、礫が各 1 点、周溝内堆積土から弥生土器片 6 点、SI3-P1 から弥生土器片 1 点、SI3-P4 から弥生土器片 2 点が出土している。このうち、カマド堆積土から出土したロクロ調整の土師器片 1 点（第 7 図 1）を図化した。外面にはロクロナデ、内面にはヘラナデが施されている。特徴から平安時代の表杉ノ入式期（氏家 1957）に比定される。

2. 溝跡

Ⅲ a 層上面では 33 条の溝跡が検出された（第 4・8 ~ 10 図）。このうち 32 条の溝跡はおもに基本層 I 層や II

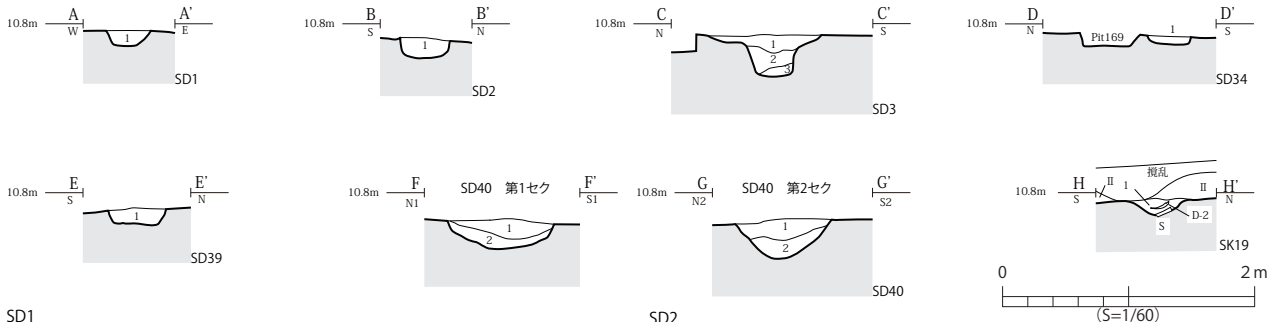


層位	色調	土性	混入物・備考
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	粘土ブロック・酸化鉄粒・風化礫・焼土・炭化物を含む。住居跡の堆積土。
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	粗砂・焼土ブロック・風化礫・炭化物ブロック・粘土ブロックを含む。カマド堆積土。
3	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	酸化鉄粒・粘土粒・粗砂・風化礫を含む。周溝内堆積土。
4	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	粗砂・風化礫・酸化鉄粒・焼土ブロック・炭化物を含む。カマド構築土。
5	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	焼土ブロック・風化礫・粘土ブロック・酸化鉄粒・粗砂・炭化物ブロックを含む。カマド構築土。
6	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	風化礫を中量・粘土ブロック・酸化鉄粒・粗砂・焼土ブロックを含む。カマド構築土。
7	褐色 (10YR5/1)	粘土質シルト	炭化物集積・ブロックを縁辺に多量・粘土質シルトブロック・酸化鉄粒・粗砂を含む。煙道堆積土。
8	暗青灰色 (5B4/1)	粗砂	炭化物集積を縁辺に多量・焼土集積を下端に中量・酸化鉄粒を含む。煙道堆積土。
9	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	炭化物ブロック・焼土小ブロック・粗砂・風化礫を含む。煙道掘り方理土。
10	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	粗砂・炭化物ブロック・焼土ブロック・風化礫を含む。掘り方理土。

層位	色調	土性	混入物・備考
P1	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	粘土ブロック・酸化鉄粒・粗砂・風化礫を含む。
P2	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	酸化鉄粒・粘土小ブロック・粗砂・風化礫を含む。
P3	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	粗砂・酸化鉄粒・粘土ブロック・風化礫を含む。
P4	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	粘土ブロック・酸化鉄粒・粗砂・風化礫を含む。
P5	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	粘土ブロック・酸化鉄粒・粗砂・風化礫を含む。

図中番号	登録番号	種別	器種	部位	出土位置	出土層位	器高	口径	底径	調整・特徴	写真図版
1	D-1	土師器(ロクロ)	甕	頸~体部	カマド内	2層	(8.0)	-	-	外面：ロクロナデ 内面：ヘラナデ	6-36

第7図 SI3 竪穴住居跡 平面図・土層断面図・出土遺物



層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR5/1)	粘土質シルト	シルト質粘土ブロック・粘土質シルトブロック・酸化鉄ブロック・マンガン粒・粗砂・炭化物を含む。

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	酸化鉄粒・細砂を含む。
2	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	細砂を多量、酸化鉄粒を含む。
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	シルト質粘土粒・粗砂・酸化鉄粒・風化礫を含む。

層位	色調	土性	混入物・備考
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	シルト質粘土粒・粘土ブロック・風化礫を含む。
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	粘土ブロック・シルト質粘土ブロック・風化礫を含む。

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	シルト質粘土・細砂・下部に粘土ブロック・酸化鉄粒を含む。

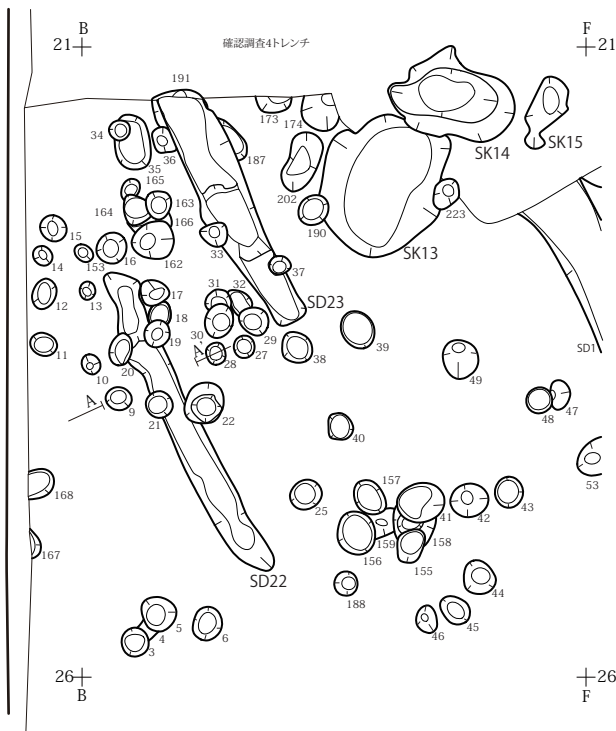
層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	酸化鉄粒・酸化鉄ブロックを含む。

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR5/1)	粘土質シルト	シルト質粘土粒・酸化鉄粒・風化礫を含む。

層位	色調	土性	混入物・備考
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	シルト質粘土ブロック・粘土ブロック・酸化鉄粒・マンガン粒を含む。

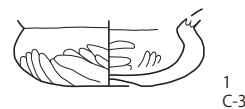
第8図 IIIa層上面検出溝跡・土坑 土層断面図 (1/60)

層を起源とする堆積土であり、近世以降のものと考えられる。全長1m前後の小規模な溝跡が大半を占めるが、検出長が6mを超え調査区外へ続くものもある。各溝跡の詳細については第1表を参照されたい。第9図1と第12図1にSD23溝跡およびSD26溝跡から出土した非ロクロ調整の土師器を掲載した。第9図1は古墳時代前期の塩釜式期（氏家1957）の小型丸底鉢である。内外面は摩滅している。外面はヘラミガキ、内面はヨコナデ、ヘラミガキを施し、底部調整はヘラケズリである。第11図1は古墳時代中期の南小泉式期（氏家1957）の坏である。外面は口縁部ヨコナデ、体部は調整不明、内面はヨコナデ、ヘラミガキを施している。なお、SD40溝跡については、堆積土の状況により古墳時代の可能性が考えられることから別に記述する。



層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	酸化鉄粒・酸化鉄ブロックを含む。

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	酸化鉄粒・酸化鉄ブロックを含む。

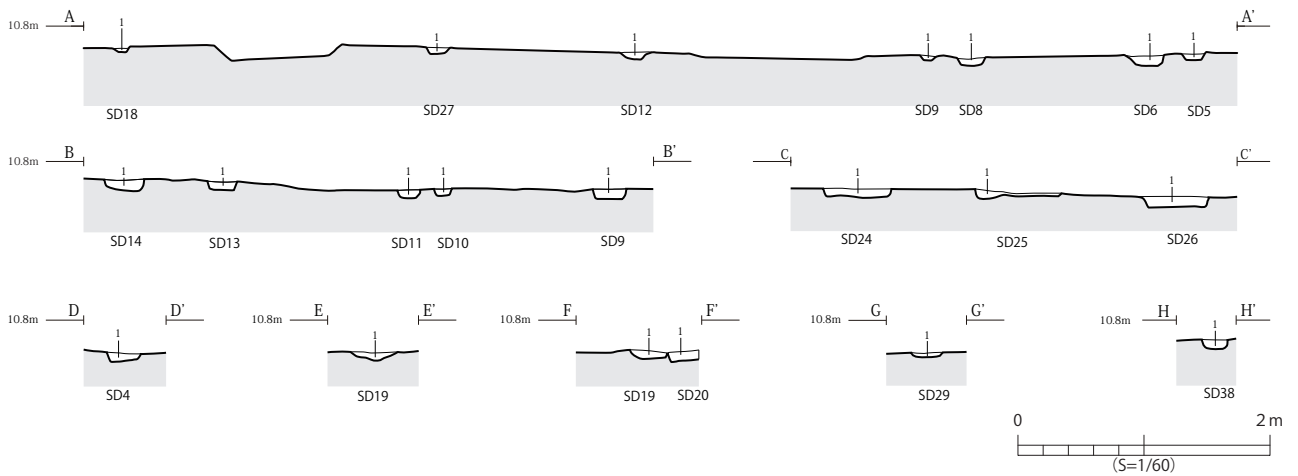
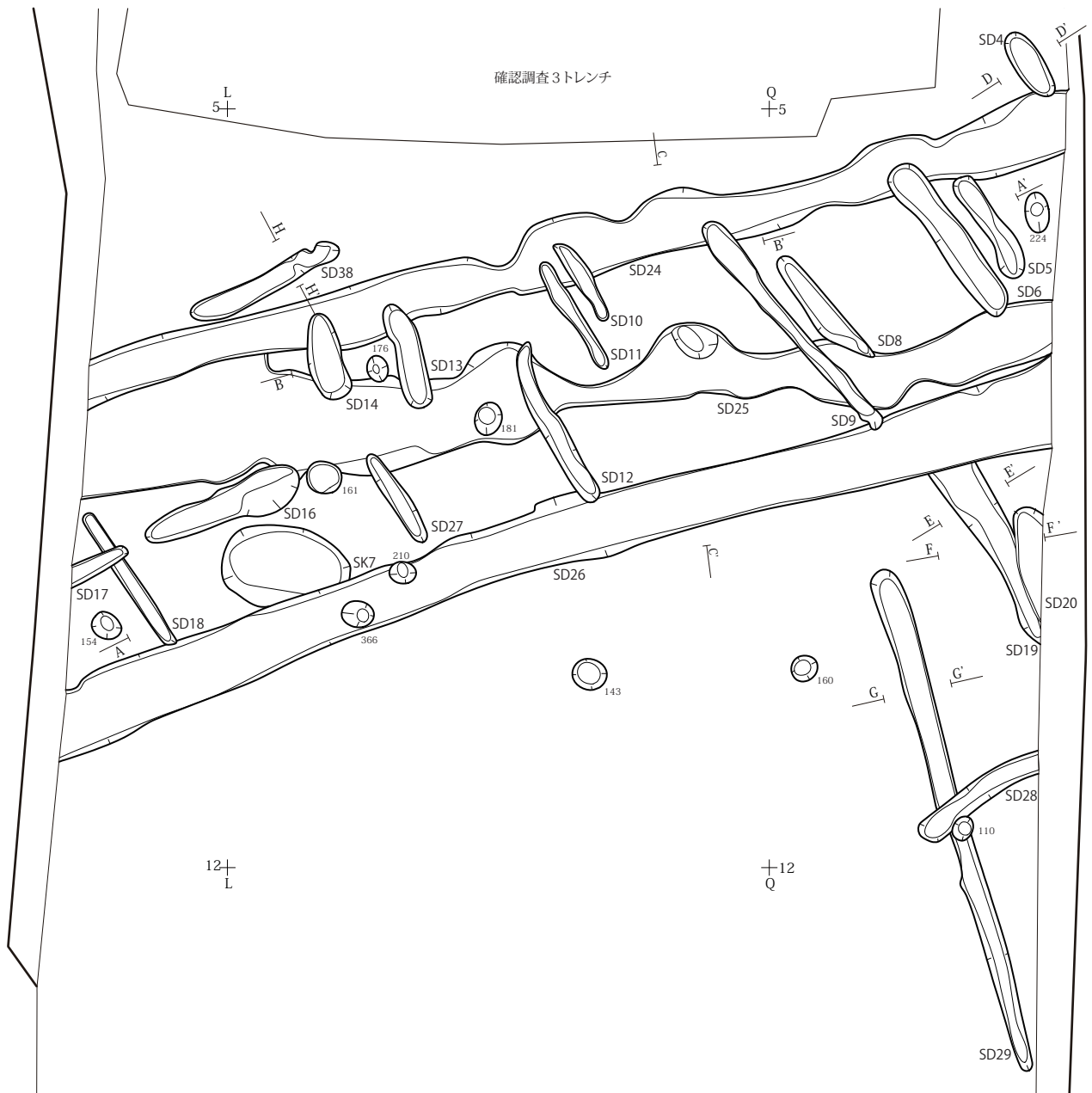


1 C-3



図中番号	登録番号	種別	器種	部位	出土遺構	出土層位	器高	口径	底径	調整・特徴	写真図版
1	C-3	土師器 (非ロクロ)	小型丸底鉢	頸~底部	SD23	堆積土	(2.05)	—	(1.8)	外面：ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ 内面：ヨコナデ、ヘラミガキ	6-34

第9図 IIIa層上面検出溝跡 平面図・土層断面図・出土遺物



第 10 図 調査区北側部分 III a 層上面検出溝跡 平面図・土層断面図 (1/60)

SD4・5・6・8・9・10・11・12・13・14・16・17・18・27・28・29・38

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	酸化鉄粒・マンガン粒を含む。

SD20

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR5/1)	粘土質シルト	シルト質粘土粒・酸化鉄粒・マンガン粒を含む。

SD25

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	シルト質粘土ブロック・粘土質シルトブロック・酸化鉄粒を含む。

SD19

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR5/1)	粘土質シルト	シルト質粘土ブロック・粘土質シルトブロック・酸化鉄粒・風化礫を含む。

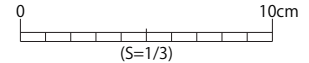
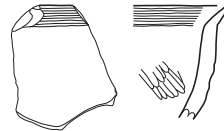
SD24

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR5/1)	粘土質シルト	シルト質粘土ブロック・粘土質シルトブロック・酸化鉄粒・風化礫を含む。

SD26

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR5/1)	粘土質シルト	シルト質粘土ブロック・粘土質シルトブロック・酸化鉄粒・風化礫を含む。

調査区北側部分Ⅲa層上面検出溝跡（第10図）土層注記表



図中番号	登録番号	種別	器種	部位	出土遺構	出土層位	器高	口径	底径	調整・特徴	写真図版
1	C-4	土師器 (非ロクロ)	坏	口縁~体部	SD26	堆積土	(4.5)	—	—	外面：口縁部ヨコナデ、体部調整不明 内面：ヨコナデ、ヘラミガキ	6-35

第11図 SD26 溝跡出土遺物

SD40 溝跡（第4・8図） 調査区南部で検出された溝跡である。SD1・2・33・39 溝跡、SK1・2・5・11 土坑、P62・151・152・175・212～214 に切られ、SK16・22 土坑を切っている。検出長は 17.81m で、さらに調査区外の東西へ続く。規模は上端幅 80～85cm、下端幅 11～15cm、深さ 13～31cm である。底面はほぼ平坦であるが西から東へ向かってわずかに低下しており、調査区内での比高差は 9cm である。方向は E - 8° - N である。断面形はやや開いた U 字形を呈する。後述する SK13 土坑と堆積土が類似しており、古墳時代の遺構の可能性もある。出土遺物は、弥生土器片 179 点、打製石器 2 点、剥片 3 点である。このうち、弥生土器片 5 点（第 16 図 15、第 17 図 4・10、第 18 図 3、第 20 図 8）を図化した。弥生土器の詳細は第 3 節でまとめて報告する。

3. 土坑

Ⅲ a 層上面では 14 基の土坑が検出された。調査区南側で多く確認されている。規模は長軸が 2m 前後のもの、1m 以下のものが多い。各土坑の詳細については、第 2 表を参照されたい。大部分の土坑の堆積土は、主に基本層の I 層や II 層を起源としており、近世以降の遺構と推定される。各土坑の出土遺物の詳細については、第 7 表を参照されたい。なお、SK13・19 土坑は、出土遺物からそれぞれ古墳時代、平安時代の時期と推定されることから

SK1

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	酸化鉄粒を上部に含む。

SK3

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	シルト質粘土ブロック・酸化鉄粒・粘土質シルトブロック・砂質シルトブロック・下部に酸化鉄ブロック・粗砂を含む。

SK5

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR5/1)	粘土質シルト	シルト質粘土ブロック・粘土質シルトブロック・酸化鉄ブロック・マンガン粒・粗砂・風化礫を含む。下部にマンガン集積がみられる。

SK7

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR5/1)	粘土質シルト	粘土質シルトブロック・酸化鉄粒・粗砂・シルト質粘土ブロックを含む。

SK9

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR5/1)	粘土質シルト	酸化鉄粒・粗砂を含む。

SK13

層位	色調	土性	混入物・備考
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	シルト質粘土粒・酸化鉄粒を多量、粘土粒を中量、炭化物・風化礫を微量含む。
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	シルト質粘土粒・粘土粒・酸化鉄粒を多量、粗砂を少量、炭化物を微量含む。

SK2

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	上部に酸化鉄粒、下部に粗砂を含み、シルト質粘土・粘土粒・砂質シルト粒を含む。

SK4

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	上部に酸化鉄粒、下部に粗砂を含み、シルト質粘土ブロック・粘土質シルトブロック・マンガン粒を含む。

SK6

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR5/1)	粘土質シルト	シルト質粘土ブロック・粘土質シルトブロック・酸化鉄ブロック・マンガン粒・粗砂・風化礫を含む。下部にマンガン集積がみられる。

SK8

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR5/1)	粘土質シルト	シルト質粘土粒・酸化鉄粒・粘土質シルトブロック・風化小礫を含む。

SK11

層位	色調	土性	混入物・備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	酸化鉄粒・粗砂・風化礫を含む。

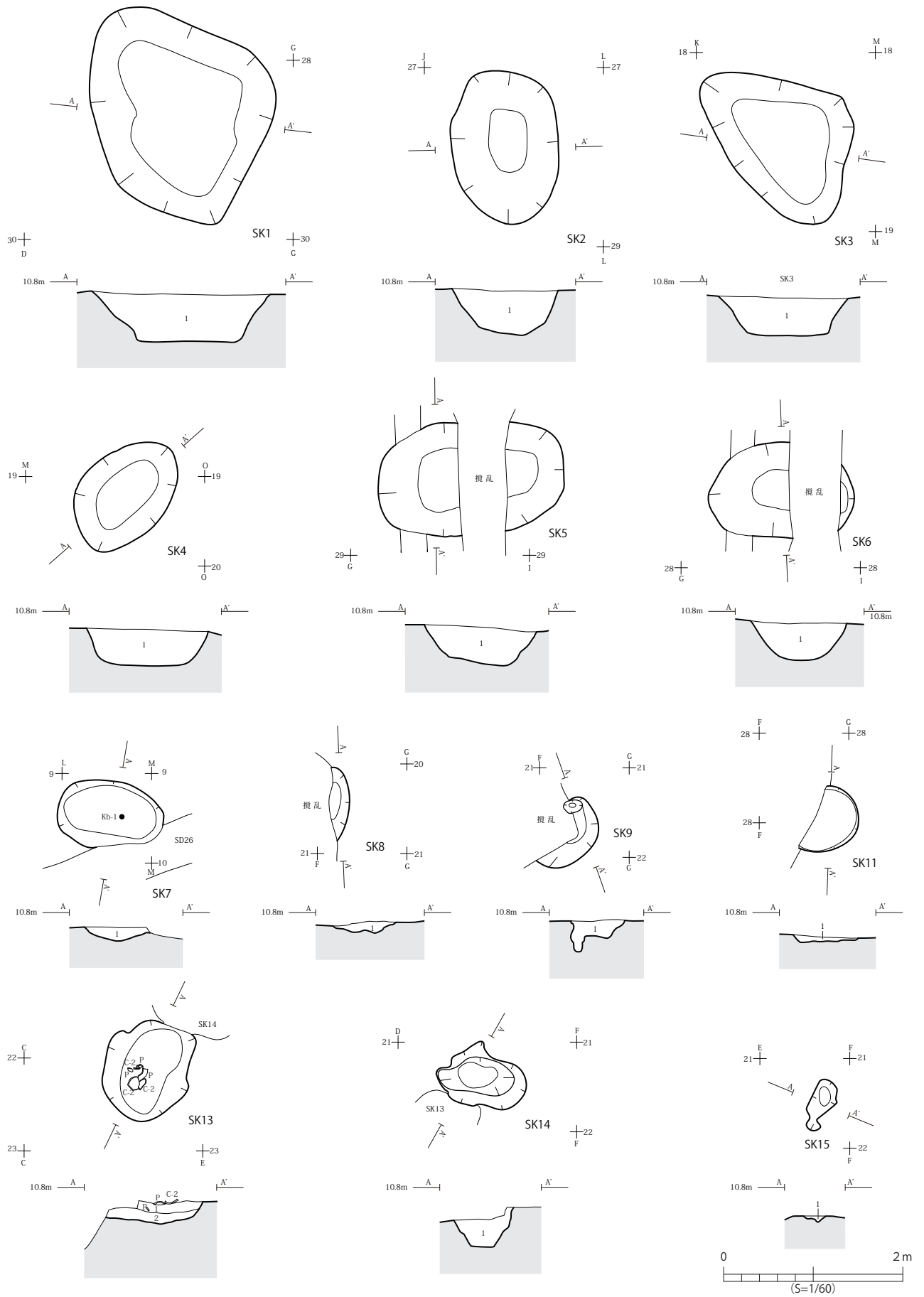
SK14

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	上部に酸化鉄粒・下部に粗砂、シルト質粘土・粘土粒・砂質シルト粒を含む。

SK15

層位	色調	土性	混入物・備考
1	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	酸化鉄粒を上部に含む。

Ⅲa層上面検出土坑（第12図）土層注記表



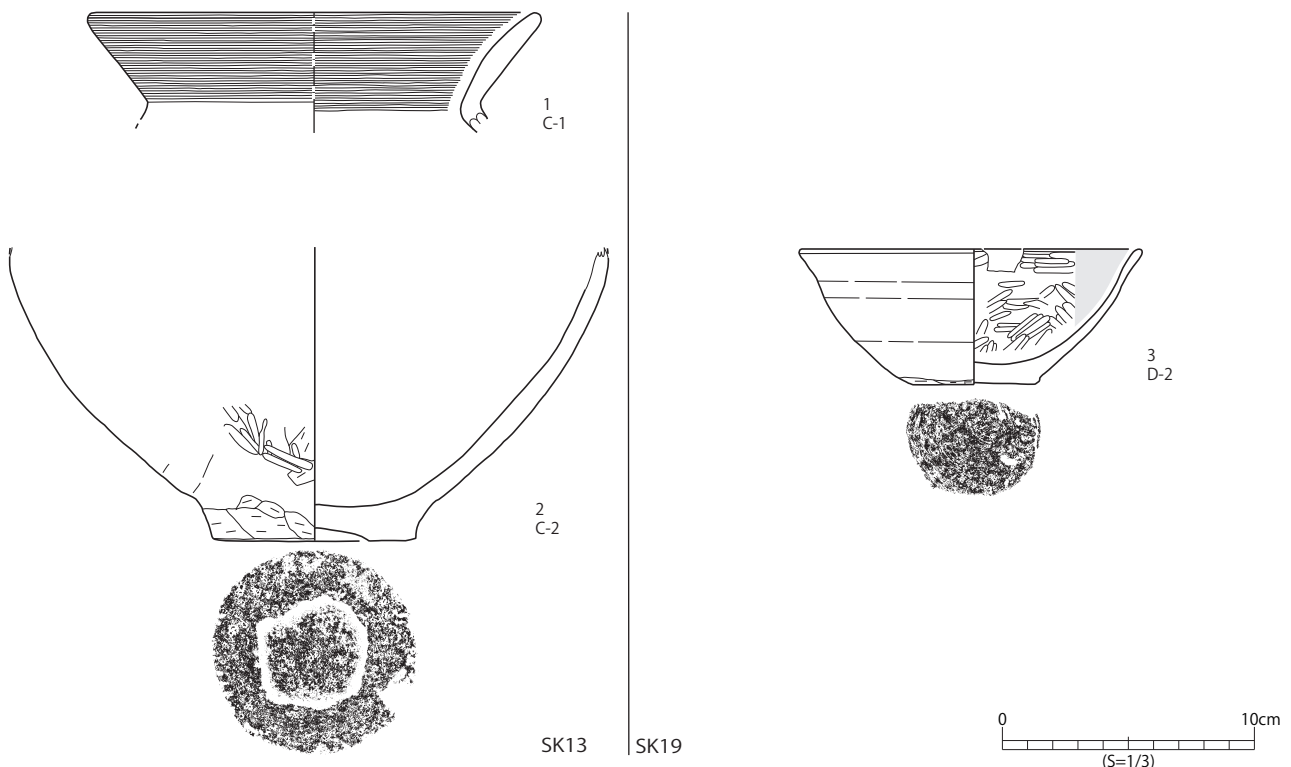
第 12 図 IIIa 層上面検出土坑 平面図・土層断面図 (1/60)

個別に記述する。

SK13 土坑（第 11・13 図） 調査区中央部南西寄りで検出された土坑である。SK14 土坑、P190・223 に切られる。規模は、長軸残存長 110cm、短軸 94cm の楕円形で、深さは 25cm である。断面形はやや開いた U 字形で、底面は平坦である。堆積土中より弥生土器片 1 点、非ロクロ調整の土師器甕片 22 点、調整不明の土師器 3 点が出土している。第 13 図 1、2 に図示した土師器甕は同一個体である。口縁部には、内外面ともにヨコナデがみられる。体部から底部にかけての外表面はヘラケズリ、ヘラミガキ、内面は調整不明である。内外面ともに、粘土の剥離痕がみられる。底部は輪台技法によるものである。古墳時代中期の南小泉式期の時期に比定される。

SK19 土坑（第 4・8・13 図） 調査区南側中央部で検出された土坑である。撤去できなかった下水管の保持のため残っていたベルトの壁を削っていた際に遺物が出土したことにより確認されたものである。したがって確認時の調査面がすでに遺構底面よりも下がっており、平面形は不明である。断面での規模は南北 53cm、深さ 12cm である。断面形は開いた V 字状を呈する。

遺物は板状の石の上にロクロ調整の土師器坏 1 点（第 13 図 3）が据えられた状態で出土している。3 はロクロ調整の土師器坏であり、その特徴から表杉ノ入式に比定される。外面はロクロナデ、内面はヘラミガキ、黒色処理を施している。底部には糸切り痕がみられる。9 世紀頃の遺構と考えられる。



図中番号	登録番号	種別	器種	部位	出土遺構	出土層位	器高	口径	底径	調整・特徴	写真図版
1	C-1	土師器（非ロクロ）	甕	口縁部	SK13	堆積土	(4.8)	(17.6)	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	6-32
2	C-2	土師器（非ロクロ）	甕	体～底部	SK13	堆積土	(11.65)	—	8.0	外面：ヘラケズリ、ヘラミガキ 底部：輪台技法 内面：調整不明	6-33
3	D-2	土師器（ロクロ）	坏	口縁～底部	SK19	堆積土	5.4	(13.4)	4.8	外面：ロクロナデ、ヘラケズリ 底部：回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色処理	6-37

第 13 図 SK13・19 土坑出土遺物

4. ピット（第 4 図）

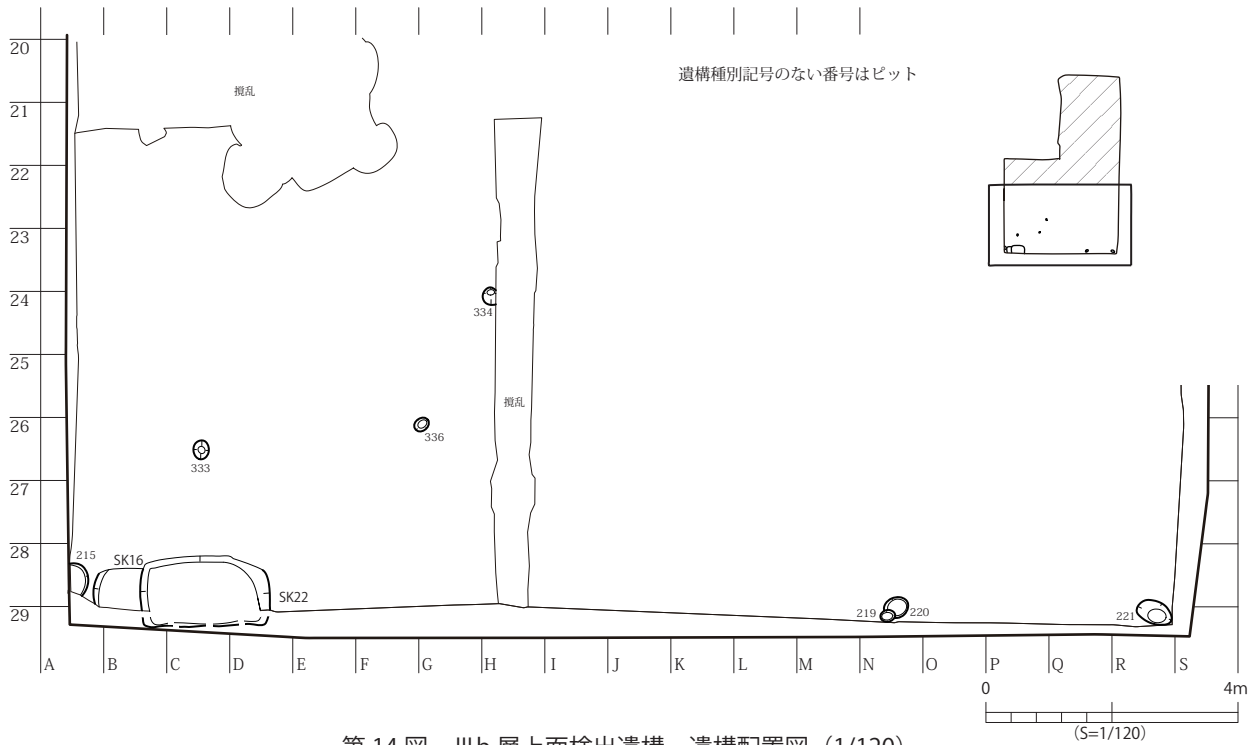
Ⅲ a 層上面では計 249 のピットが検出された。ピットの平面形は円形・楕円形・不整形円形・不整形形で一定していない。規模は長軸 10～55cm、短軸 9～42cm、深さは 5～64cm である。最も多く見られるのは長軸 21～30cm、短軸 11～20cm、深さは 9～21cm である。堆積土は全て単層であり、おもに基本層の I 層を起源としている。柱根や柱痕跡を持つものは確認されなかった。

遺物は 34 のピットから出土しており、弥生土器片、非ロクロ調整の土師器片、ロクロ調整の土師器片、調整不明の土師器、剥片等がみられる。このほかに確認調査時に 14 のピットを調査している。確 P1・3・4 からは弥生土

器片が各1点ずつ出土している。いずれも小破片のため図化するまでにいたらなかった。

第2節 III b層上面遺構

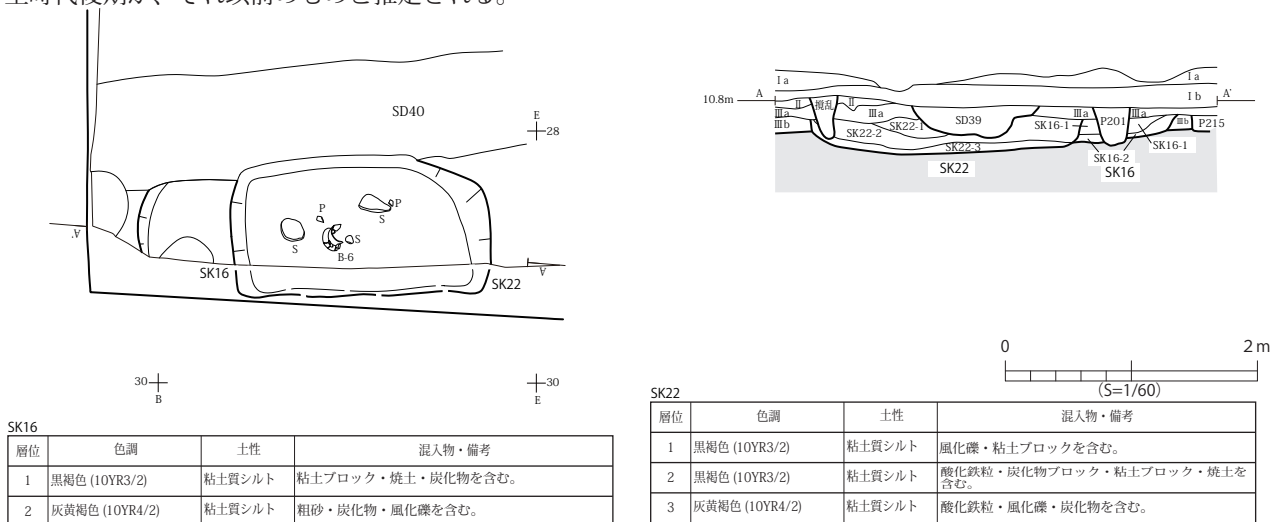
III b層上面で検出された遺構は土坑2基とピット7である(第14図)。



第14図 III b層上面検出遺構 遺構配置図(1/120)

1. 土坑

SK16土坑(第15図) 調査区南西隅で検出された土坑である。SD39・40溝跡、SK22土坑、P201に切れ、南側は調査区外へ延びるため平面形は不明である。規模は、長軸残存長83cm、短軸70cmで、深さは23cmである。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。堆積土は2層からなる。出土遺物はない。SK22との重複関係より弥生時代後期か、それ以前のものとして推定される。



第15図 III b層上面検出土坑 平面図・土層断面図(1/60)

SK22土坑(第15図) 調査区南西隅で検出された土坑である。SD40溝跡に切れ、SK16土坑を切っている。調査終了時に調査区壁側を精査し、遺構の南壁を確認した。平面形は隅丸長方形と考えられる。規模は長軸198cm、短軸現存長74cmで、深さは38cmである。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。堆積土は3層からなり、III a層を起源とする土壌を主体としている。

堆積土中からの出土遺物は、弥生土器片 74 点、剥片 1 点、礫 3 点である。遺構の中央の位置で堆積土 1 層中から、天王山式の広口壺（第 19 図 5）が口縁部を下にして斜めの状態で出土している。ほかに堆積土中出土の土器片 2 点（第 18 図 9、第 19 図 3）を図化した。これらの出土遺物から弥生時代後期に属すると考えられる。

2. ピット（第 14 図）

ピットの平面形は不整形・不整形で、規模は長軸 24～58cm、短軸 18～36cm、深さは 1～27cm である。堆積土は全て単層で、基本層Ⅲ a 層を起源としている。柱根や柱痕跡は確認されなかった。

P215 と P221 から弥生土器片が出土しているが、いずれも小破片のため図化するまでにいたらなかった。

第 3 節 Ⅲ層出土遺物

弥生時代の遺物包含層であるⅢ a～d 層より出土した弥生土器に、層位間で形式的に大きな差異が認められなかったことから、この節では、遺構出土資料を含め、種別毎に一括して記載する（第 16～23 図）。

基本層Ⅲ層及びⅢ a 層上面からの出土遺物は、弥生土器 3,603 点、不明土製品 4 点、礫石器 7 点、打製石器 84 点、剥片 167 点、軽石 2 点、礫 6 点、珪化木 2 点の計 3,875 点である。

1. 弥生土器（第 16～20 図）

土器はすべて破片資料で、内外面とも摩滅しているものが多く、遺存状態は必ずしも良好ではない。遺構および包含層出土の資料数は 4,434 点で、これらは、第Ⅰ群土器から第Ⅲ群土器に分類される（第 7 表）。なお分類にあたっては、本遺跡第 4 次発掘調査報告書（仙台市教委 1993）に準拠した。

(1) 第Ⅰ群土器（第 16 図）

弥生時代中期後葉の十三塚式に比定される土器群である。遺構およびⅢ a～d 層から出土しているが、総数 16 点と少ない。全て破片資料である。図化した資料はいずれも壺か甕の一部と考えられる、口縁部から体部上半にかけての資料である。

すべて半裁竹管状・櫛歯状施文具による同時施文の平行沈線文が施され、3 本一画のもの（第 16 図 1～4）、2 本一画のもの（第 16 図 5）がある。これらの文様はいずれも体部上半以上に施文されている。文様には連弧文（1～4）と菱形文（5）があり、それらは重層重圏される。1 は口縁部資料である。口縁部下の半裁竹管状の文様は直線で、その直下の文様から連弧文を施す。5 は 2 本一画であるが、沈線の深度が異なり、左側の沈線はすべて浅い。

(2) 第Ⅱ群土器（第 16 図）

弥生時代後期の天王山式に比定される土器群である。Ⅲ層の各細分層から粗密なく出土しており、合計 135 点を数える。全て破片資料で、全体の器形・文様が判るものはない。

第Ⅱ群土器は口縁部資料・体部資料・底部資料・部位不明資料に分け、取り扱った。なお、各部位資料の数量に関しては、口縁部～体部資料のものは口縁部資料数、体部～底部資料のものは底部資料数に含めた。

口縁部資料（第 16 図）

明確に器種がわかるものはないが、壺や甕の口縁部と考えられる。口縁部資料は下半文様の有無・加飾方法、形態により以下の A～C 類に分類される。

A 類：口縁部の下部に装飾を加えるもので、この部位が分離されるもの。これらはさらに加飾方法の違いにより、以下の 2 類に細分される。

A 1 類：口縁部末端に新たに粘土を貼付し、押圧痕あるいは刺突を加えるもの（第 16 図 6～11）。

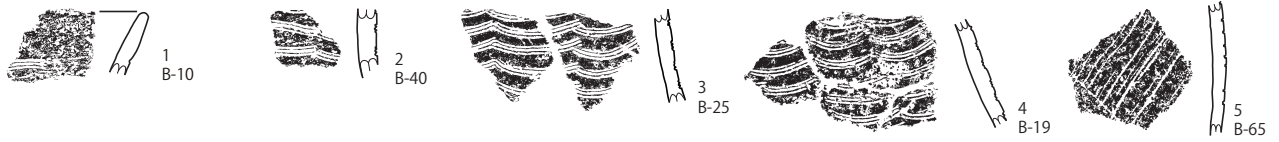
口縁部末端に貼付された粘土には、押圧痕あるいは刺突が、上方・下方に加えられるもの（6・7 A1 類①）、押圧痕が下方のみに加えられるもの（8～11 A1 類②）の 2 者が認められる。

A1 類①は上方に刺突、下方に押圧痕が交互に加えられ、交互刺突類似文となる。口縁部末端から上には、下から上へ縦に押し引いたスリット状の刺突文（6）、斜行縄文（7）が施文される。6 は竹管状の工具を用いて

上方の刺突および下方の押圧圧痕を施文し、口唇部に斜行縄文を施文している。7は口縁部内面にも斜行縄文が施文される。

A1類②は、波状文が作り出されている。口縁部末端から上には、斜行縄文のみのもの(8・9)、斜行縄文上に綾絡文を施文するもの(10・11)がある。8・9は口唇部および口縁部内面にも斜行縄文を施文し、幅の広い粘土を貼付けて波状文を作っている。10・11は細い紐状の粘土を貼付け、波状文を作っている。11は体部外

第I群

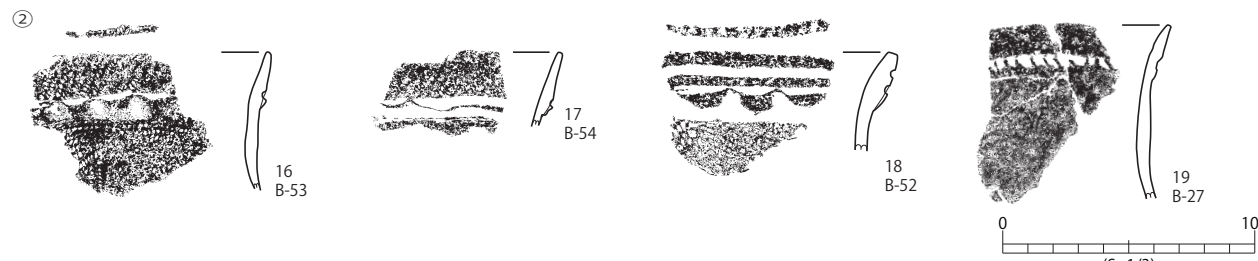
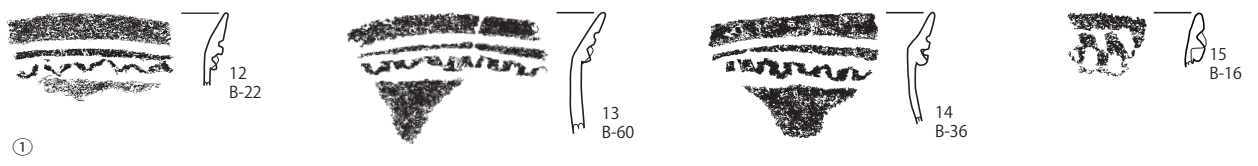


第II群

II A1類



II A2類



図番号	登録番号	器種	部位	出土地区・遺構	出土層位	底径	調整・特徴	分類	写真図版
1	B-10	壺 or 甕	口縁部	SD25	堆積土	—	外面：3本一画、直線文、連弧文 口縁内面：ナデ	I	4-9
2	B-40	壺 or 甕	体部	O8	IIIa	—	外面：3本一画、連弧文 内面：ナデ	I	4-10
3	B-25	壺 or 甕	体部	第4トレンチ	III	—	外面：3本一画、連弧文 内面：ナデ	I	4-11
4	B-19	壺 or 甕	体部	P286	堆積土	—	外面：3本一画、連弧文 内面：ナデ	I	4-12
5	B-65	壺 or 甕	体部	B22	—	—	外面：沈線、菱形文 内面：ナデ	I	4-13
6	B-49	壺 or 甕	口縁～頸部	O6	IIIb	—	外面：口唇→横位LR縄文 口縁下半→交互刺突類似文(上：刺突 下：押圧) 口縁上半→スリット文 口縁内面：摩滅	II A1	4-14
7	B-63	壺 or 甕	口縁部	L23	IIIc	—	外面：口唇→摩滅 口縁下半→波状文(下：押圧) 口縁上半→横位LR縄文 口縁内面：横位LR縄文	II A1	4-15
8	B-26	壺 or 甕	口縁部	南東部	IIIa 上面	—	外面：口唇→横位LR縄文 口縁下半→波状文(下：押圧) 口縁上半→横位LR縄文 口縁内面：横位LR縄文	II A1	4-16
9	B-32	壺 or 甕	口縁部	B24	IIIa	—	外面：口唇→横位LR縄文 口縁下半→波状文(下：押圧) 口縁上半→横位LR縄文 口縁内面：横位LR縄文	II A1	4-17
10	B-62	壺 or 甕	口縁～頸部	M6	IIIc	—	外面：口縁下半→波状文(下：押圧) 口縁上半→横位LR縄文、綾絡文 口縁内面：ナデ、摩滅	II A1	4-18
11	B-9	壺 or 甕	口縁～体部	N9	IIIa	—	外面：口縁下半→波状文(下：押圧) 口縁上半→横位LR縄文、綾絡文 体→横位LR縄文、綾絡文 口縁内面：上半→横位LR縄文、綾絡文 体内面：ナデ	II A1	4-19
12	B-22	壺 or 甕	口縁～頸部	SR1	堆積土	—	外面：口縁下半→交互刺突類似文(上：刺突 下：押圧) 口縁上半：沈線 内面：ナデ	II A2	4-20
13	B-60	壺 or 甕	口縁～頸部	B25	IIIc	—	外面：口縁下半→交互刺突類似文(上：刺突 下：押圧) 口縁上半→沈線 口縁内面：ナデ、摩滅	II A2	4-21
14	B-36	壺 or 甕	口縁～頸部	A23	IIIa	—	外面：口縁下半→交互刺突類似文(上：刺突 下：押圧) 口縁上半→沈線文 口縁内面：ナデ	II A2	4-22
15	B-16	壺 or 甕	口縁部	SD40	堆積土	—	外面：口縁下半→交互刺突文 口縁上半→無文 口縁内面：ナデ	II A2	4-23
16	B-53	壺 or 甕	口縁～頸部	Q27	IIIb	—	外面：口唇→横位LR縄文 口縁下半→波状文(下：押圧) 口縁上半→横位LR縄文 頸上半→縦位LR縄文 頸下半→横位LR縄文 口縁内面：摩滅	II A2	4-24
17	B-54	壺 or 甕	口縁～頸部	R26	IIIb	—	外面：口唇→摩滅 口縁下半→沈線、波状文(下：押圧) 口縁上半→横位LR縄文 口縁内面：ナデ、摩滅	II A2	4-25
18	B-52	壺 or 甕	口縁～頸部	L23	IIIb	—	外面：口唇→横位LR縄文 口縁下半→波状文(下：押圧) 口縁上半→横位LR縄文、沈線 頸→横位LR縄文 口縁内面：ナデ	II A2	4-26
19	B-27	壺 or 甕	口縁～体部	南東部	IIIa 上面	—	外面：口縁下半→刺突文 口縁上半→無文 口縁内面：ナデ	II A2	4-27

第16図 弥生土器①

面の下方と口縁部内面にも綾絡文がみられる。

A2 類：口縁部下部に沈線を引き下端を分離し、押圧圧痕あるいは刺突を加えるもの（第 16 図 12～19）

口縁部下部の分離部分には、押圧圧痕あるいは刺突が、上方・下方に加えられるもの（第 16 図 12～15 A2 類①）、押圧圧痕あるいは刺突が下方にのみ加えられるもの（第 16 図 16～19 A2 類②）の 2 者が認められる。

A2 類①は交互刺突類似文となる。12～14 は上方に刺突、下方に押圧圧痕が交互に加えられている。15 は上方に押圧圧痕、下方に刺突が交互に加えられている。各土器の口縁部下部より上は無文である。

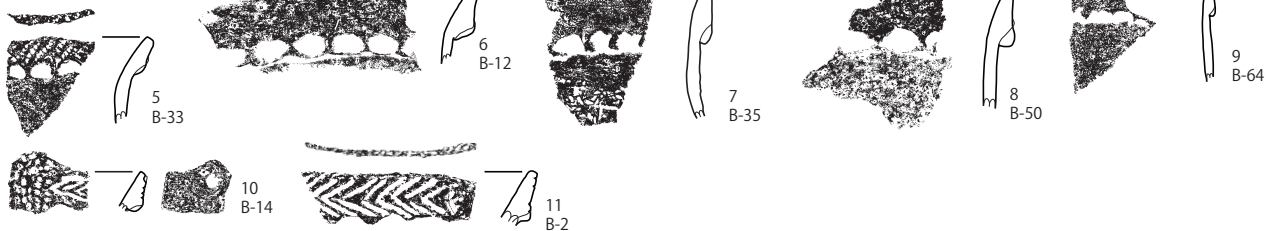
A2 類②は、押圧圧痕が加えられ波状文を作っているもの（16～18）、斜めに刺突が加えられているもの 19 の 2 者がある。口縁部より上には斜行縄文（16・17）、斜行縄文と沈線を施文されるもの（18）がある。また 16・18 は、口唇部および体部に斜行縄文を施文する。19 は口縁部下部より上は無文である。

B 類：口縁部の下部に装飾を加えるもので、この部位が分離されないもの。これらはさらに加飾方法の違いに

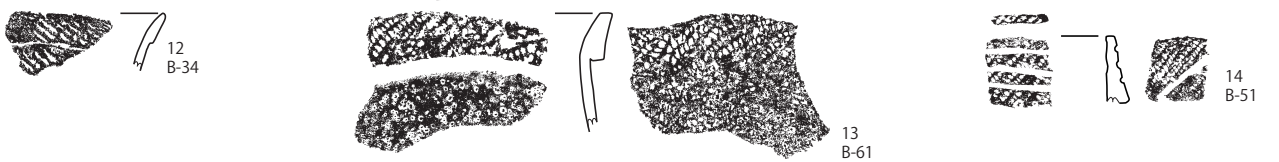
第 II 群 II B1 類



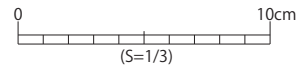
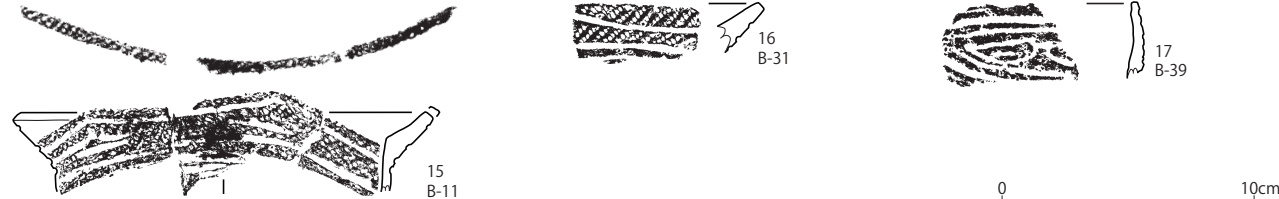
第 II 群 II B2 類



第 II 群 II C1 類



第 II 群 II C2 類



図中 番号	登録 番号	器種	部位	出土地区 ・遺構	出土層位	底径	調整・特徴	分類	写真 図版
1	B-24	壺 or 甕	口縁～頸部	確認調査 第 4 トレンチ	III	—	外面：口唇→横位 LR 縄文 口縁下半→交互指突類似文（上：刺突 下：押圧） 口縁上半→横位 LR 縄文 口縁内面：ナデ	II B1	4-28
2	B-13	壺 or 甕	口縁～頸部	SD26	堆積土	—	外面：口縁下半→交互指突類似文（上：刺突 下：押圧） 口縁上半→沈線文、山形状突起 口縁内面：ナデ	II B1	4-29
3	B-37	壺 or 甕	口縁～頸部	Q29	III a	—	外面：口縁下半→刺突文 口縁上半→横位 LR 縄文、沈線 口縁内面：ナデ 波状口縁の可能性あり	II B1	4-30
4	B-15	壺 or 甕	口縁部	SD40	堆積土	—	外面：口縁下半→刺突文 口縁上半→沈線 口縁内面：ナデ 波状口縁の可能性あり	II B1	4-31
5	B-33	壺 or 甕	口縁～頸部	B24	III a	—	外面：口唇→横位 LR 縄文 口縁下半→押圧文 口縁上半→横位 LR 縄文 口縁内面：ナデ	II B2	4-32
6	B-12	壺 or 甕	口縁～頸部	SD26	堆積土	—	外面：口縁下半→押圧文 口縁上半→無文 口縁内面：ナデ	II B2	4-33
7	B-35	壺 or 甕	口縁～体部	P8	III a	—	外面：口縁下半→押圧文 口縁上半→無文 体下端→RL 縄文 口縁内面：ナデ	II B2	4-34
8	B-50	壺 or 甕	口縁～頸部	S7	III b	—	外面：口縁下半→押圧文 口縁上半→ナデ 口縁内面：ナデ	II B2	4-35
9	B-64	壺 or 甕	口縁～頸部	M24	III c	—	外面：口縁下半→押圧文 口縁上半→横位 LR 縄文 口縁内面：ナデ、摩滅	II B2	4-36
10	B-14	壺 or 甕	口縁部	SD40	堆積土	—	外面：口縁下半→押圧文 口縁上半→矢羽状沈線、有孔、刺突文 口縁内面：ナデ	II B2	4-37
11	B-2	壺 or 甕	口縁部	SI2	掘り方埋土	—	外面：口唇→横位 LR 縄文 口縁下半→押圧文 口縁上半→矢羽状沈線 口縁内面：ナデ	II B2	4-38
12	B-34	壺 or 甕	口縁～頸部	F27	III a	—	外面：口唇→横位 RL 縄文 頸→横位 RL 縄文 口縁内面：ナデ	II C1	4-39
13	B-61	壺 or 甕	口縁～頸部	M6	III c	—	外面：口唇→横位 LR 縄文 口縁→横位 LR 縄文 口縁内面：横位 LR 縄文	II C1	4-40
14	B-51	壺 or 甕	口縁部	I26	III b	—	外面：口唇→横位 LR 縄文 口縁→横位 LR 縄文、沈線 口縁内面：横位 LR 縄文	II C1	4-41
15	B-11	壺 or 甕	口縁～頸部	SD26	堆積土	—	外面：口唇→横位 LR 縄文 口縁→横位 LR 縄文、沈線 口縁内面：ナデ 山形状口縁	II C2	4-42
16	B-31	壺 or 甕	口縁部	N7	III a	—	外面：口唇→横位 LR 縄文 口縁→横位 LR 縄文、沈線 内面：ナデ	II C2	4-43
17	B-39	壺 or 甕	口縁部	N6	III a	—	外面：横位 LR 縄文のち沈線、磨消縄文 内面：ナデ	II C2	4-44

第 17 図 弥生土器②

より、以下の2類に細分される。

B1類：下部と末端に交互の刺突あるいは押圧圧痕を加えるもの(第17図1～4)

下部に刺突が加えられ、末端には押圧圧痕(1・2)、刺突(3・4)を加える2者がある。

末端に押圧圧痕を加える1の下部より上の文様は斜行縄文である。2の刺突はコの字状の工具を用いている。下部より上の文様は2条の沈線を施文し、口縁部に刻みを有することから山形状の口縁部を構成する。末端に交互の刺突を加える3と4は、断面形が長方形の工具を用い交互に刺突を行い鋸歯状の文様を施文する。下部より上の文様は1条の沈線である。

B2類：末端のみに押圧圧痕を加えるもの(第17図5～11)

末端より上は、斜行縄文のみなもの(5)、無文のもの(6～9)、矢羽状沈線のもの(10・11)がある。5は口唇部に斜行縄文を施文している。10と11は同一個体である。10は口唇部に斜行縄文を施文し、11は矢羽状沈線の左側に、山状に丸みをもつ粘土を貼付け、5列に縦に並ぶ刺突と1つの貫通孔を施文する。

C類：下部に装飾を加えないもの。これらは末端の段の有無により、以下の2類に細分される。

C1類：A類、B類と同様に明瞭な段を持つもの(第17図12～14)

口縁部上は斜行縄文のみなもの(12・13)、斜行縄文と沈線のもの(14)がある。12は体部に、13と14は口唇部および口縁部内面に斜行縄文を施文する。13は波状口縁である。

C2類：明瞭な段を持たないもの(第17図15～17)

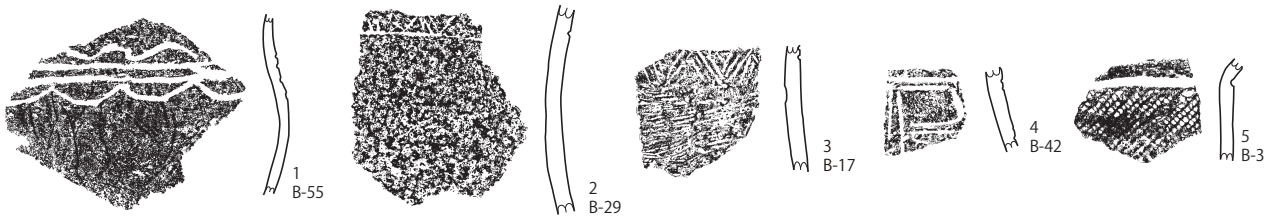
口縁部は肥厚するが、末端に明瞭な段を持たず、頸部に移行するものである。ただし、口縁部直下に沈線文を巡らし口縁部を明確にするものもある(15)。文様は斜行縄文と沈線のもの(15～17)がある。15と16は同一個体であり、口唇部に斜行縄文を施文する山形状の口縁部である。17は磨消縄文である。

体部資料(第18図1～9)

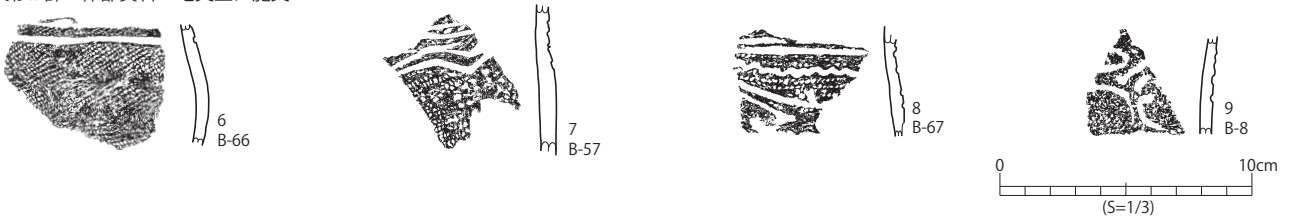
頸部を含めた資料で、地文以外の文様をもつものである。明確な器種は不明であるが、口縁部資料同様その多くは壺や甕と考えられる。

文様は沈線文のみである。無文上に施文されるもの(1～5)と、地文上に施文されるもの(6～9)がある。無文上に施文される沈線文には、連弧文(1)、鋸歯文(2・3)、方形を描くもの(4)、直線文(5)がある。3は地文を

第II群 体部資料 沈線文



第II群 体部資料 地文上に施文



图中番号	登録番号	器種	部位	出土地区・遺構	出土層位	底径	調整・特徴	分類	写真図版
1	B-55	壺 or 甕	体部	J22	IIIb	—	外面：沈線、波状文 内面：ナデ	II	5-1
2	B-29	壺 or 甕	体部	南東部	IIIa 上面	—	外面：体上半→沈線、鋸歯文 内面：ナデ	II	5-2
3	B-17	壺 or 甕	体部	SD40	堆積土	—	外面：体下半→横位LR縄文 体上半→沈線3、4条で鋸歯文を施す 内面：ナデ	II	5-3
4	B-42	壺 or 甕	体部	L27	IIIa	—	外面：沈線で方形の文様を施す 内面：ナデ	II	5-4
5	B-3	壺 or 甕	体部	S12	掘方埋土	—	外面：体上半→ナデ、沈線 体下半→横位LR縄文 内面：ナデ	II	5-5
6	B-66	壺 or 甕	体部	B24	IIIc	—	外面：沈線、直線文、横位LR縄文 内面：ナデ	II	5-6
7	B-57	壺 or 甕	体部	J27	IIIb	—	外面：沈線、連弧文の変形、横位LR縄文の磨消縄文、補修孔あり 内面：ナデ	II	5-7
8	B-67	壺 or 甕	体部	N6	IIIc	—	外面：沈線、波状文、横位LR縄文の磨消縄文 内面：ナデ	II	5-8
9	B-8	壺 or 甕	体部	SK22	堆積土	—	外面：沈線、弧文、横位LR縄文、磨消縄文 内面：ナデ	II	5-9

第18図 弥生土器③

施文した後に沈線を施文するが、沈線文を入れる範囲には地文を施文していない。5は沈線文を施文した後に地文を施文している。地文上に施文されるものの沈線文には、直線文(6)、弧文を変形させたもの(7)、波状文(8)、弧状のもの(9)がある。そのうち、7～9は磨消縄文である。

(3) 第Ⅲ群土器(第19図)

第Ⅰ・Ⅱ群以外の主として地文のみのもの、無文のものを第Ⅲ群土器とした。第Ⅰ群土器および第Ⅱ群土器の胎土などの観察を行った結果、第Ⅲ群土器は第Ⅱ群土器の天王山式期のものと考えられる。

口縁部資料(第19図1～6)

地文のものは1～3である。1・2は口唇部および内外面に斜行縄文を施文している。2・3は波状口縁である。無文のものは4～6である。4は小型の壺で底部外面に木葉痕が認められる。5は粗製広口壺である。ミガキはなく、外面には一部指圧痕が認められる。

蓋資料(第19図7)

伏鉢状の蓋であるが、上部が破損しているため、つまみの有無は判断できない。外面には斜行縄文単節LRが施されている。

体部資料(第19図8～17)

地文の体部は斜行縄文が殆どであるが、16のみ燃糸文Lである。その他は、斜行縄文単節LRのもの(8～12)、斜行縄文単節RLのもの(13・14)、斜行縄文無節RLのもの(15)である。12は、体部上半に粒の細かい斜行縄文LRを施文し、その上から粒の大きい斜行縄文LRを施文している。14は頸部が「く」状に屈曲する小型の壺である。無文の体部は17の1点のみである。補修孔がみられる。

底部資料(第20図1～11)

底部の器形は平底あるいは、やや上げ底になるもの(1～9)、外面中央が窪む強い上げ底のもの(10・11)がある。体部末端の器形にはやや膨らむもの(3)、外側にやや張り出すもの(1・5～9)がある。底部の外面は木葉痕が多いが、1は斜行縄文が施文されている。

2. 不明土製品(第20図12)

残存値で、長さ4.0cm以上、幅3.3cm以上、厚さ0.6cm程度である。縁辺はすべて欠損し、中央部がドーム形に膨れている。縁辺の一部に摩滅が観察される。異形土器の一部の可能性も考えられる。

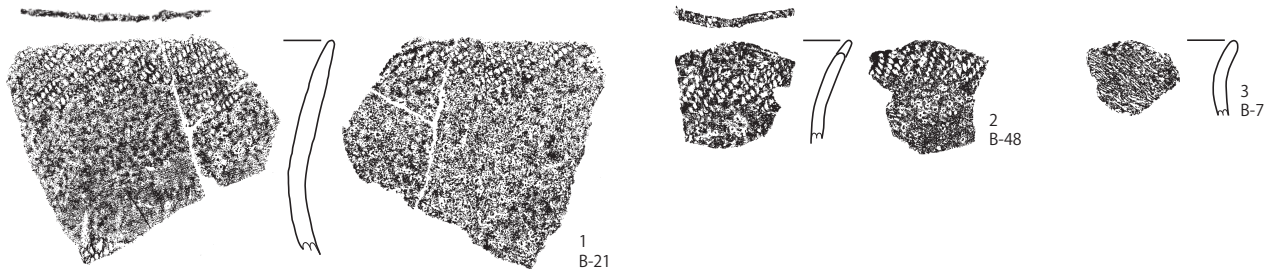
3. 石器(第21～23図)

石器の出土点数は322点である。

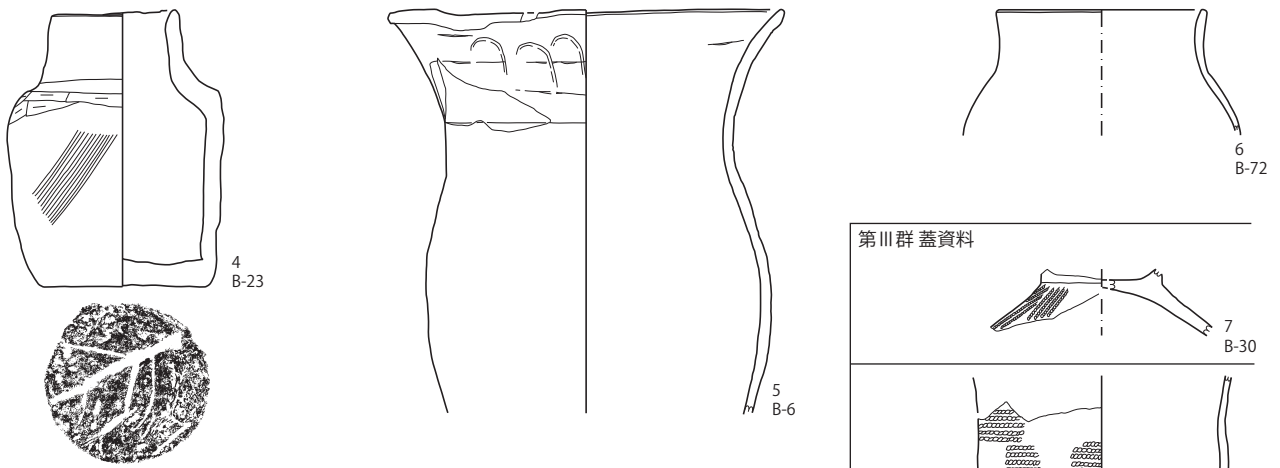
確認された器種は石鏃、尖頭器、石錐、ピエス・エスキュー、二次加工痕を有する剥片、微細剥離痕を有する剥片、剥片、石核、石鋸、敲打具に転用されたと考えられる磨製石斧、礫石器、石皿である。用いられている石材には、流紋岩、碧玉、黒曜岩、デイサイト質砂岩などがある。

石鏃には、アメリカ式石鏃(第21図1～3)と、基部が破損したもの(第21図4)がある。アメリカ式石鏃は4点出土しているが、3は唯一の完形品である。1～3は基部が平坦で基端寄りに深い抉りが両側縁に作られている。5～7は石鏃の未製品である。5は先端部と右側縁が欠損している。表裏両面のほぼ全縁辺に細部調整がみられる。基端の調整が、アメリカ式石鏃の調整に類似することから、アメリカ式石鏃の未製品と考えられる。1～3のアメリカ式石鏃と比較すると、表裏両面の中央部が厚いことから製作作業を中断したものと考えられる。6は表面左側縁及び裏面右側縁に粗い細部調整がみられる。表裏両面の中央部には、素材剥片の剥離面が残されている。全体の形状から石鏃の未製品と判断される。7は表面の全縁辺及び裏面の左側縁に細部調整がみられる。表面の左側縁には特に細かな細部調整を加えているが、その裏面にあたる右側縁には細部調整がみられない。この細部調整を加えている際に、先端部が破損してしまったものと考えられる。尖頭器は、胴部に抉りをもつ(第21図8)。この抉り

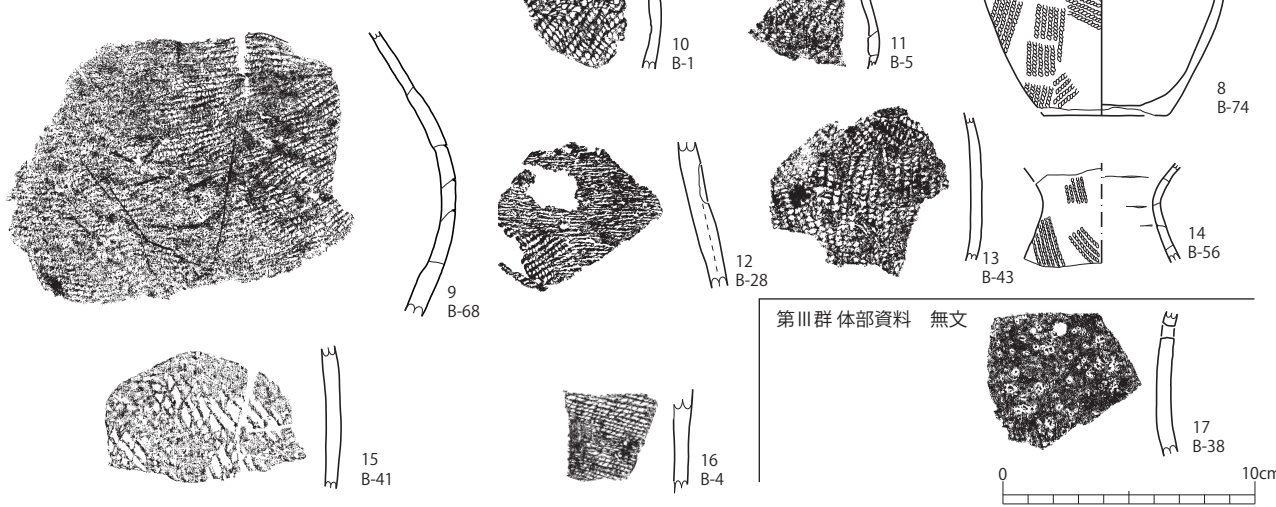
第III群 口縁部資料 地文



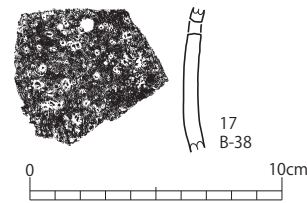
第III群 口縁部資料 無文



第III群 体部資料 地文



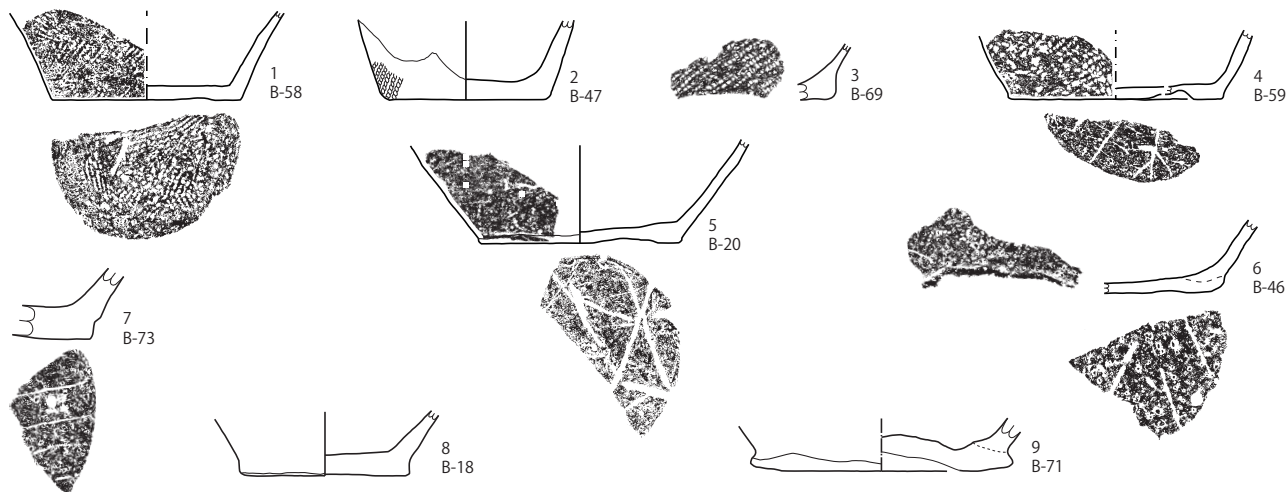
第III群 体部資料 無文



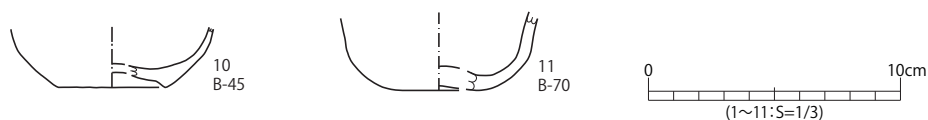
図中 番号	登録 番号	器種	部位	出土地区 ・遺構	出土層位	底径	調整・特徴	分類	写真 図版
1	B-21	壺 or 甕	口縁~頸部	Pit319	堆積土	—	外面：口唇→横位 LR 縄文 口縁上半→横位 LR 縄文 頸下端→横位 LR 縄文 口縁内面：横位 LR 縄文	Ⅲ	5-10
2	B-48	壺 or 甕	口縁~頸部	O6	Ⅲb	—	外面：口唇→横位 LR 縄文 口縁上半→横位 LR 縄文 口縁内面：横位 LR 縄文 補修孔	Ⅲ	5-11
3	B-7	壺 or 甕	口縁~頸部	SK22	堆積土	—	外面：RL 縄文 口縁内面：ナデ 波状口縁	Ⅲ	5-12
4	B-23	壺	口縁~底部	確認調査 第4トレンチ	Ⅲ	6.0	外面：体部→ヘラケズリ、ヘラナデ、ナデ 底部→木葉痕 口縁内面：ナデ 完形	Ⅲ	5-13
5	B-6	広口壺	口縁~体部	SK22	堆積土	—	外面：指圧痕 内外面：一部スス付着 口縁内面：ナデ	Ⅲ	5-14
6	B-72	壺	口縁~体部	P20	Ⅲd	—	外面：無文 内面：ナデ	Ⅲ	5-15
7	B-30	蓋	蓋部	南東部	Ⅲa 上面	—	外面：横位 LR 縄文 内面：ナデ	Ⅲ	5-16
8	B-74	壺	頸~底部	I23	Ⅲd	(4.5)	外面：横位 LR 縄文 内面：ナデ	Ⅲ	5-17
9	B-68	壺 or 甕	体部	J24	Ⅲc	—	外面：横位 LR 縄文 内面：ナデ 粘土紐痕	Ⅲ	5-18
10	B-1	壺 or 甕	体部	N28	Ⅲa	—	外面：横位 LR 縄文、綾絡文 内面：ナデ、ミガキ	Ⅲ	5-19
11	B-5	壺 or 甕	頸~体部	SI2	掘り方理土	—	外面：横位 LR 縄文 内面：ナデ	Ⅲ	5-20
12	B-28	壺 or 甕	体部	南東部	Ⅲa 上面	—	外面：縦位 LR 縄文、横位 LR 縄文 内面：ナデ 粘土貼付痕あり	Ⅲ	5-21
13	B-43	壺 or 甕	体部	Q28	Ⅲa	—	外面：横位 RL 縄文 内面：ナデ	Ⅲ	5-22
14	B-56	壺	頸部	G22	Ⅲb	—	外面：横位 LR 縄文 内面：ナデ	Ⅲ	5-23
15	B-41	壺 or 甕	体部	J7	Ⅲa	—	外面：無節 RL 縄文 内面：ナデ	Ⅲ	5-24
16	B-4	壺 or 甕	体部	SI2	掘り方理土	—	外面：擦系文 L 内面：ナデ	Ⅲ	5-25
17	B-38	壺 or 甕	体部	M8	Ⅲa	—	外面：無文 内面：ナデ 補修孔	Ⅲ	5-26

第19図 弥生土器④

第III群 底部資料 平底・やや上げ底

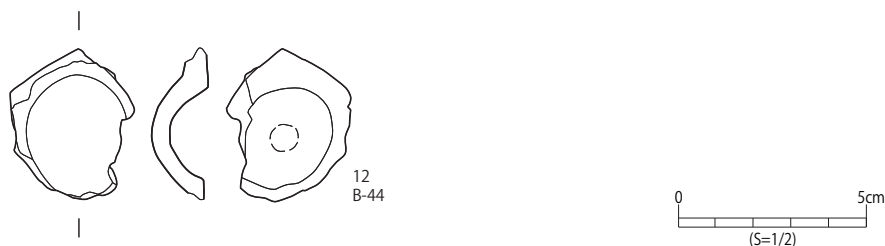


第III群 底部資料 外面中央が窪む強い上げ底のもの



図番号	登録番号	器種	部位	出土地区・遺構	出土層位	底径	調整・特徴	分類	写真図版
1	B-58	壺 or 甕	体～底部	Q10	III a	(7.5)	外面：体部→横位 LR 縄文 底部→平底、横位 LR 縄文 内面：ナデ	III	5-27
2	B-47	壺 or 甕	体～底部	I25	III a	(4.3)	外面：体部→横位 LR 縄文 底部→平底 内面：ナデ	III	5-28
3	B-69	壺 or 甕	体～底部	M6	III c	—	外面：体部→末端やや膨らむ、横位 LR 縄文 底部→平底、ナデ 内面：ナデ	III	5-29
4	B-59	壺 or 甕	体～底部	O6	III a	(8.4)	外面：体部→末端やや張り出す、横位 LR 縄文 底部→やや上げ底、木葉痕 内面：ナデ	III	5-30
5	B-20	壺 or 甕	体～底部	Pit286	掘り方埋土	(7.8)	外面：末端やや張り出す 体部→横位 LR 縄文 底部→やや上げ底、木葉痕 内面：ナデ	III	5-31
6	B-46	壺 or 甕	体～底部	M8	III a	—	外面：末端やや張り出す 体部→横位 LR 縄文 底部→平底、木葉痕 内面：ナデ	III	5-32
7	B-73	壺 or 甕	体～底部	B24	III d	—	外面：末端やや張り出す 体部→無文 底部→やや上げ底、木葉痕 内面：ナデ	III	5-33
8	B-18	壺 or 甕	体～底部	SD40	堆積土	(6.75)	外面：末端やや張り出す 体部→無文 底部→平底 内面：ナデ	III	5-34
9	B-71	壺 or 甕	底部	M5	III c	(10.4)	外面：末端やや張り出す 体部→無文 底部→剥離 内面：ナデ	III	5-35
10	B-45	壺 or 甕	体～底部	M5	III a	(4.2)	外面：体部→無文、ナデ 底部→外面中央が窪む強い上げ底 内面：ナデ	III	6-1
11	B-70	壺 or 甕	体～底部	L6	III c	(3.6)	外面：体部→無文、ナデ 底部→外面中央が窪む強い上げ底 内面：ナデ	III	6-2

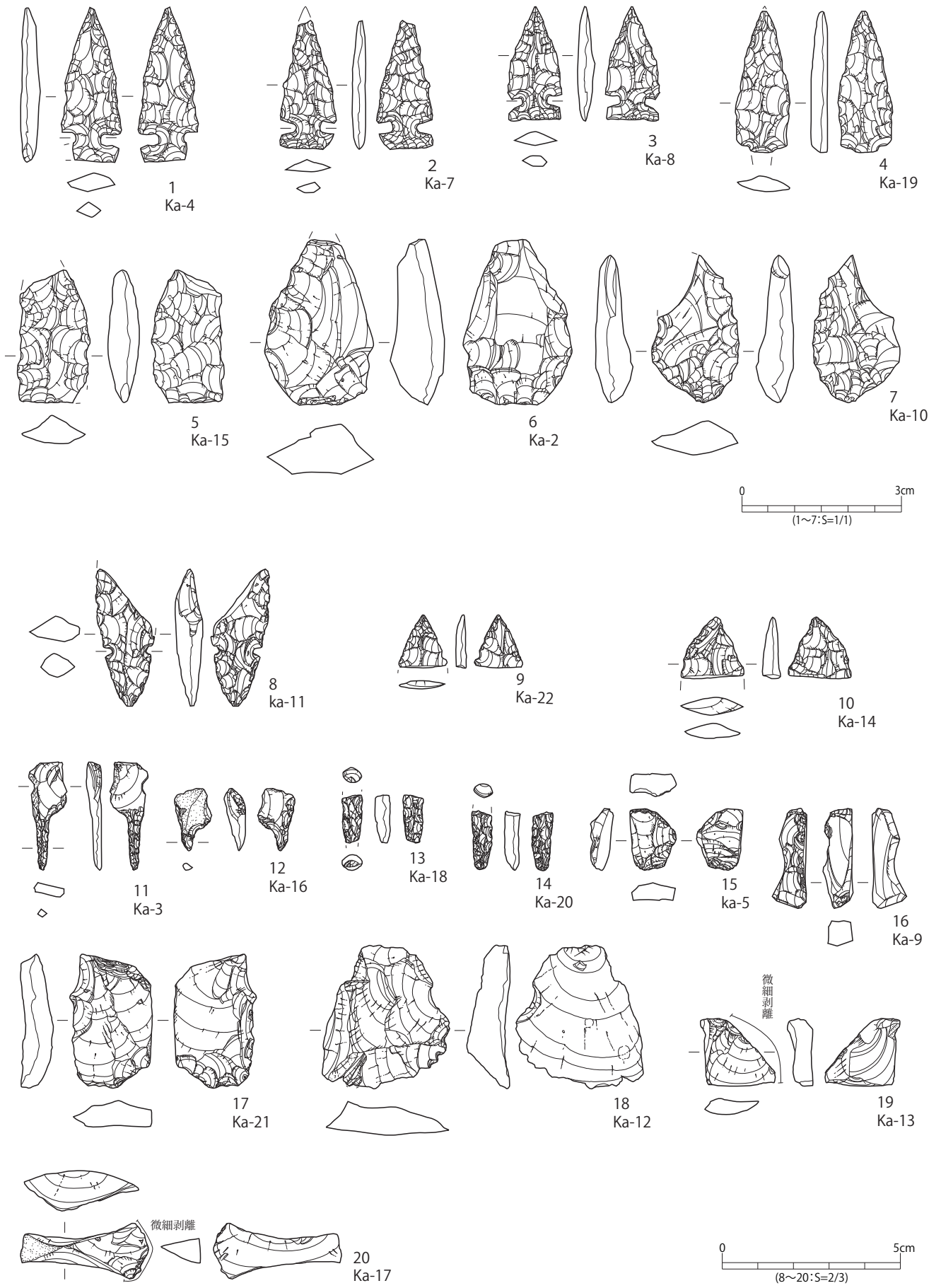
不明土製品



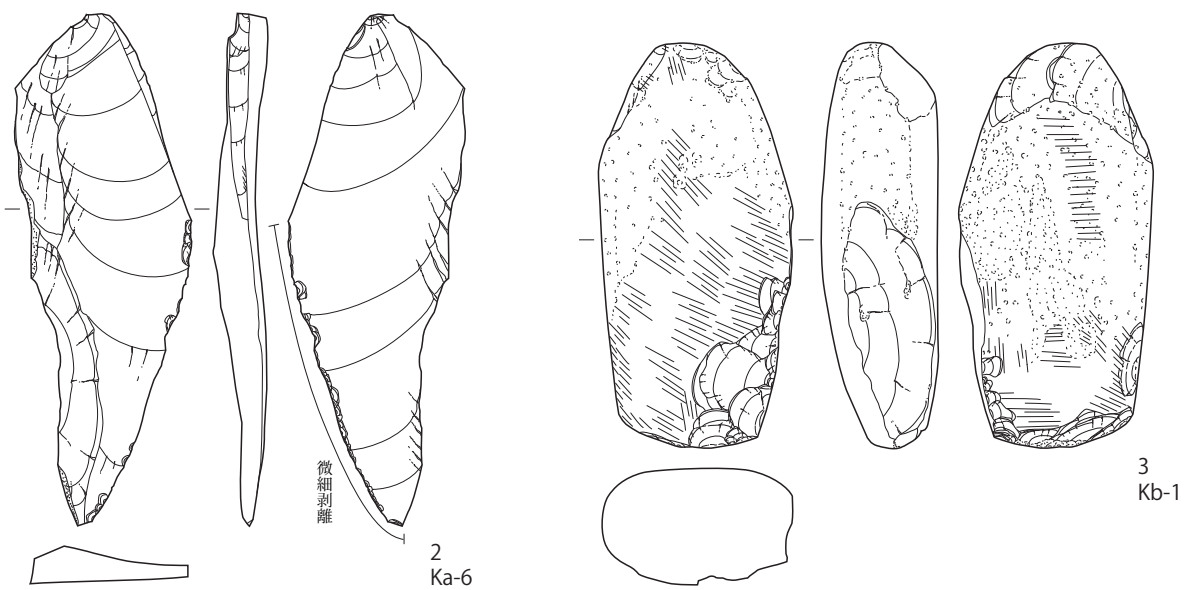
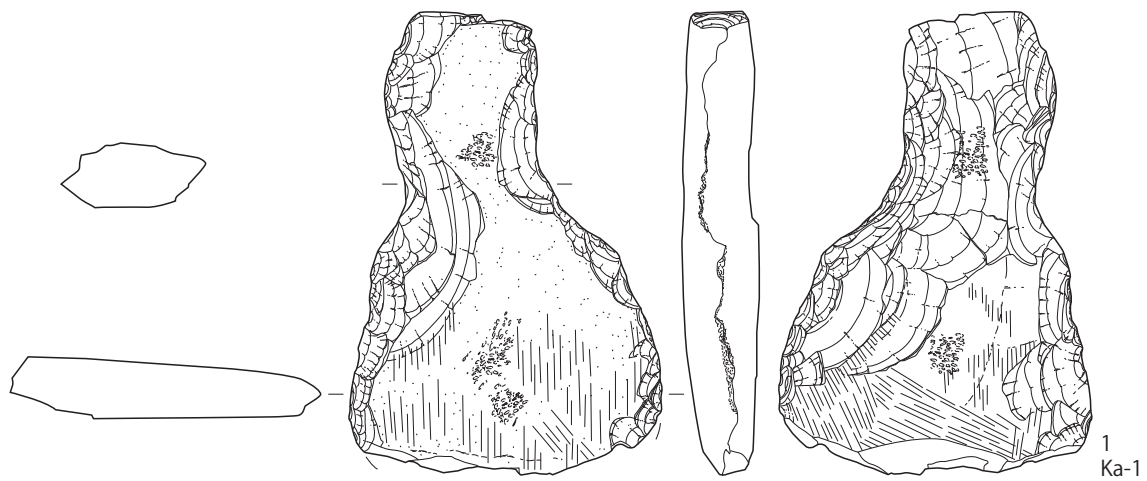
図中番号	登録番号	器種	部位	出土地区	出土層位	長さ	幅	厚さ	調整・特徴	写真図版
12	B-44	不明土製品	—	L5	III a	(4.0)	(3.3)	0.5～0.6	縁辺はすべて欠損 一部厚減あり ドーム形に膨れる 異形土器の一部か？	6-3

第20図 弥生土器⑤

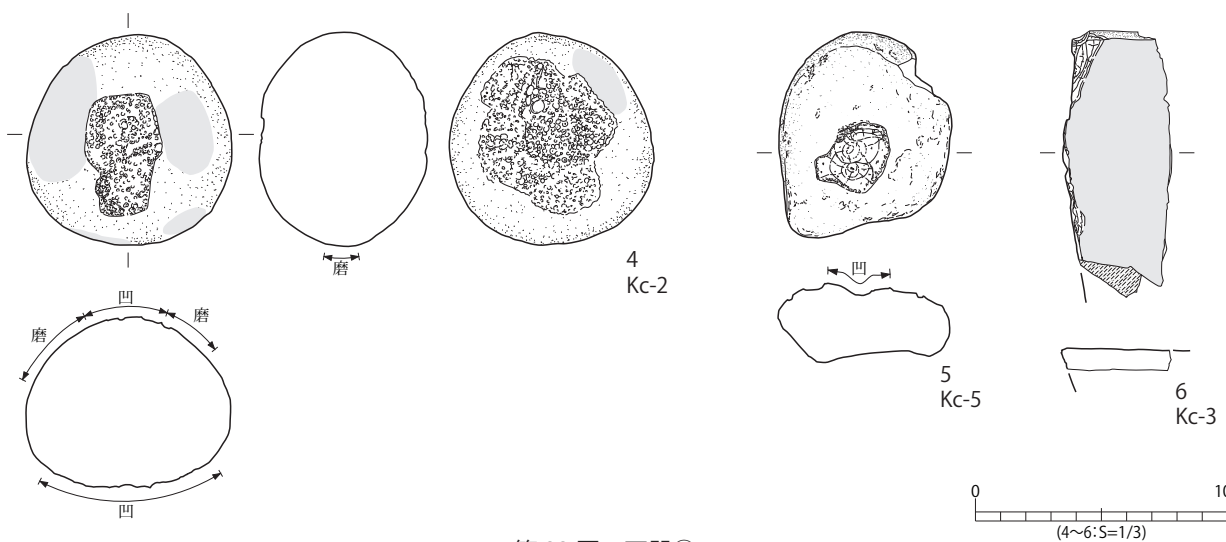
は、図示した右側の面に細部調整を加えた後、左側の面に加工を施して形成されている。第21図9・10は尖頭器の破損品である。両者とも先端部のみの残存である。表裏両面の全体に細部調整を加えている。石錐には、基部を有するもの(第21図11・12)と、先端部のみの破損品(第21図13・14)がある。12は、表面の大部分が自然面に覆われた剥片を素材としている。ピース・エスキューは2点あり(第21図15・16)、15は、上端縁と下端縁が対になり1対の細部調整がみられる。16は、長軸の両端にツブレ状の剥離が認められ、図示した左側の面の右側縁に細部調整がみられる。他に二次加工痕を有する剥片(第21図17・18)と、微細剥離痕を有する剥片(第21図19・20、第22図2)がある。石鋏(第22図1)は、表面に自然面が残る。刃部に研磨痕がみられ、刃先は欠損している。磨製石斧(第22図3)の刃部には敲打痕が認められ、ほぼ平坦になっていることから、敲打具に転用されたものと考えられる。礫石器には、表裏両面に凹痕が残るもの(第22図4、第23図1)、片面にのみ



第21図 石器①

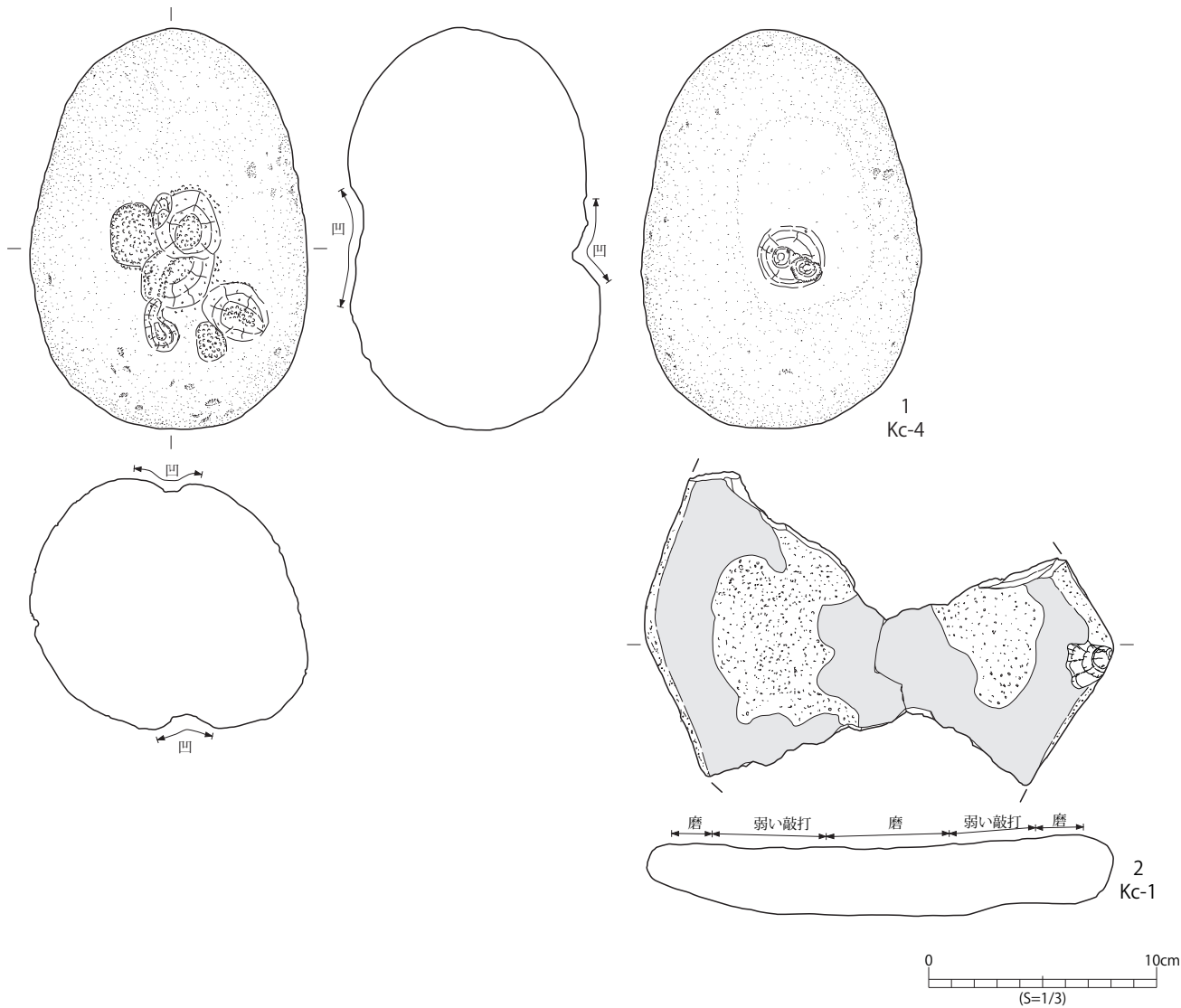


0 5cm
(1~3:S=1/2)



0 10cm
(4~6:S=1/3)

第22図 石器②



図中 番号	登録 番号	種別・器種	出土地区 ・遺構	出土 層位	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量 (g)	特 徴	写真 図版
21-1	Ka-4	アメリカ式石鏃	N6	IIIa層	流紋岩	29.1	11.3	3.7	0.9	基部左縁欠損	6-4
21-2	Ka-7	アメリカ式石鏃	N7	IIIa層	碧玉	24.2	10.5	2.8	0.6	先端部欠損	6-5
21-3	Ka-8	アメリカ式石鏃	N8	IIIa層	碧玉	21.5	10.2	3.3	0.8	完形	6-6
21-4	Ka-19	石鏃	SD24	堆積土	流紋岩	26.6	10.4	3.3	0.7	基部欠損	6-7
21-5	Ka-15	石鏃未製品	SD3	堆積土	流紋岩	25.0	13.7	6.0	1.8	先端部右側縁欠損	6-8
21-6	Ka-2	石鏃未製品	D27	IIIa層	流紋岩	46.4	30.6	15.4	18.0	先端部欠損	6-9
21-7	Ka-10	石鏃未製品	L15	IIIb層	流紋岩	41.2	24.5	10.6	7.1	先端部・左側縁欠損	6-10
21-8	Ka-11	尖頭器	O21	III d層	流紋岩	57.5	24.8	11.7	10.2	先端部欠損	6-11
21-9	Ka-22	尖頭器	SD26	堆積土	流紋岩	15.0	13.6	3.0	0.4	先端部のみ残存	6-12
21-10	Ka-14	尖頭器	SD2	堆積土	流紋岩	17.4	17.8	5.3	1.2	先端部のみ残存	6-13
21-11	Ka-3	石錐	M5	IIIa層	玉髄	45.4	16.0	6.7	2.8	基部を有する	6-14
21-12	Ka-16	石錐	SD12	堆積土	流紋岩	26.2	15.7	9.1	2.6	基部を有する	6-15
21-13	Ka-18	石錐	SD24	堆積土	流紋岩	20.2	8.7	6.6	1.4	先端部のみ残存	6-16
21-14	Ka-20	石錐	SD26	堆積土	流紋岩	24.6	8.64	6.5	1.5	先端部のみ残存	6-17
21-15	Ka-5	ピエス・エスキュー	N6	IIIa層	流紋岩	26.0	19.6	9.7	4.8	剥片を素材とする	6-18
21-16	Ka-9	ピエス・エスキュー	O6	IIIa層	珪化凝灰岩	41.9	12.7	14.4	7.7	剥片を素材とする	6-19
21-17	Ka-21	二次加工痕を有する剥片	SD26	堆積土	流紋岩	56.2	34.8	13.9	25.4	末端と側縁に二次加工痕あり	6-20
21-18	Ka-12	二次加工痕を有する剥片	pit283	堆積土	流紋岩質凝灰岩	60.3	53.6	18.3	40.8	末端と側縁に二次加工痕あり 末端は鋸歯縁状	6-21
21-19	Ka-13	微細剥離痕を有する剥片	pit288	堆積土	流紋岩	28.5	31.5	10.8	5.8	側縁に微細剥離痕あり	6-22
21-20	Ka-17	微細剥離痕を有する剥片	SD24	堆積土	流紋岩	23.4	53.8	17.3	12.4	側縁に微細剥離痕あり	6-23
22-2	Ka-6	微細剥離痕を有する剥片	N6	IIIa層	頁岩	135.7	47.2	14.8	53.5	側縁に微細剥離痕あり 石材は相馬か北上が産地か？	6-25
22-1	Ka-1	石鏃	P19	IIIa層上面	頁岩	122.6	82.9	20.9	232.5	表面は自然面 刃部に強い線状痕を伴う研磨痕あり 刃先は欠損 石材は相馬か北上が産地か？	6-24
22-3	Kb-1	磨製石斧	SK7	堆積土	緑泥石片岩	107.6	51.7	31.2	303.8	刃部は敲打痕 敲打具に転用された可能性がある 石材は相馬か北上が産地か？	6-26
22-4	Kc-2	礫石器	K23	IIIb層	デイサイト質砂岩	83.7	81.6	67.6	620	表面中央部に浅い凹が集中 その周囲には磨面がみられる	6-27
22-5	Kc-5	礫石器	K28	IIIc層	デイサイト	81.7	68.6	31.5	124.8	片面中央部に凹あり 一部欠損	6-28
22-6	Kc-3	砥石	B26	IIIc層	粘板岩	105.5	43.8	9.0	66.8	表面と左側面の一部が使用面 裏面は剥落している	6-29
23-1	Kc-4	礫石器	J23	IIIc層	デイサイト質砂岩	175.8	121.6	109.5	2380	表裏面の中央部に凹あり 片面には複数認められ、その周囲には敲打痕がみられる	6-30
23-2	Kc-1	石皿	L06	IIIa層	デイサイト質砂岩	205.7	138.1	34.9	1050	表面一面に研磨面と弱い敲打面が残る	6-31

第 23 図 石器③

凹痕が残るもの(第22図5)の2種類がある。4は表裏両面とも浅い凹痕で、凹痕の周囲には磨面が確認される。第23図1の凹痕は片面に複数認められ、その周囲には敲打痕がみられる。第22図5、第23図1の凹痕は深い。砥石(第22図6)は、表面と左側面の一部が使用により平坦になっている。裏面は剥落している。石皿は、片面に研磨面と弱い敲打面が残っている(第23図2)。

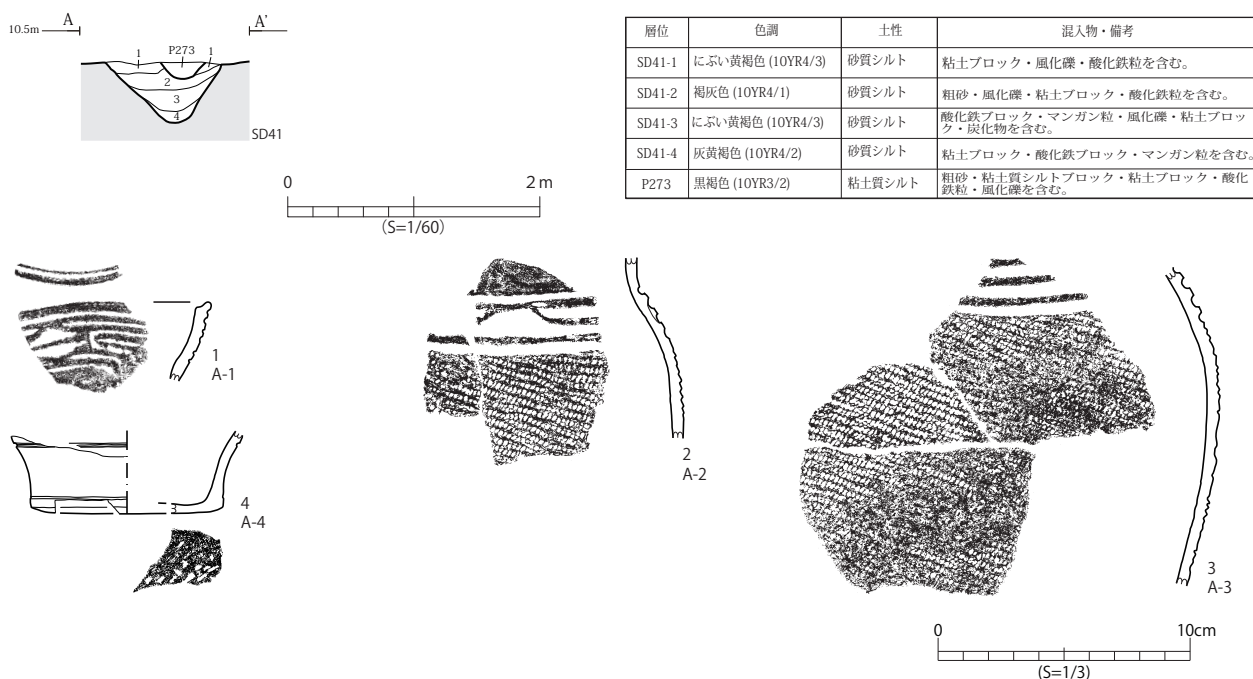
第4節 IV層上面遺構と出土遺物

IV層上面では溝跡1条、土坑2基、調査区北から中央南寄りに分布するピット70の、合計73遺構を検出した(第25図)。

1. 溝跡

SD41 溝跡(第24・25図) 調査区北部で検出された溝である。P273・276～280・321・338・339に切られ、P351を切っている。検出長は11.20mで、さらに調査区外の東西へ続く。規模は上端幅100～156cm、下端幅15～25cm、深さ25～48cmである。底面はほぼ平坦であるが西から東へ向かってわずかに低下しており、比高差は約4cmである。方向はE-36°-Nである。断面形はやや開いたU字形を呈している。

堆積土中から縄文土器片が19点出土している。このうちの4点(第24図1～4)を図示した。1は口縁部資料である。文様は沈線で変形工字文を施す。口唇部には沈線文をめぐらせている。2・3は体部資料であるが、同一個体と考えられるものである。文様は沈線と縄文の組み合わせもので、2は彫去によってπ字状文様を施している。3は、体部上半に沈線文が施される。ともに沈線間に赤色顔料が残存している。4は底部資料である。体部上半と下端に沈線文を施している。底部の外面には網代痕がみられる。これらの遺物は、縄文時代晩期の大洞A'式と考えられる。



第24図 SD41 溝跡 土層断面図・出土遺物

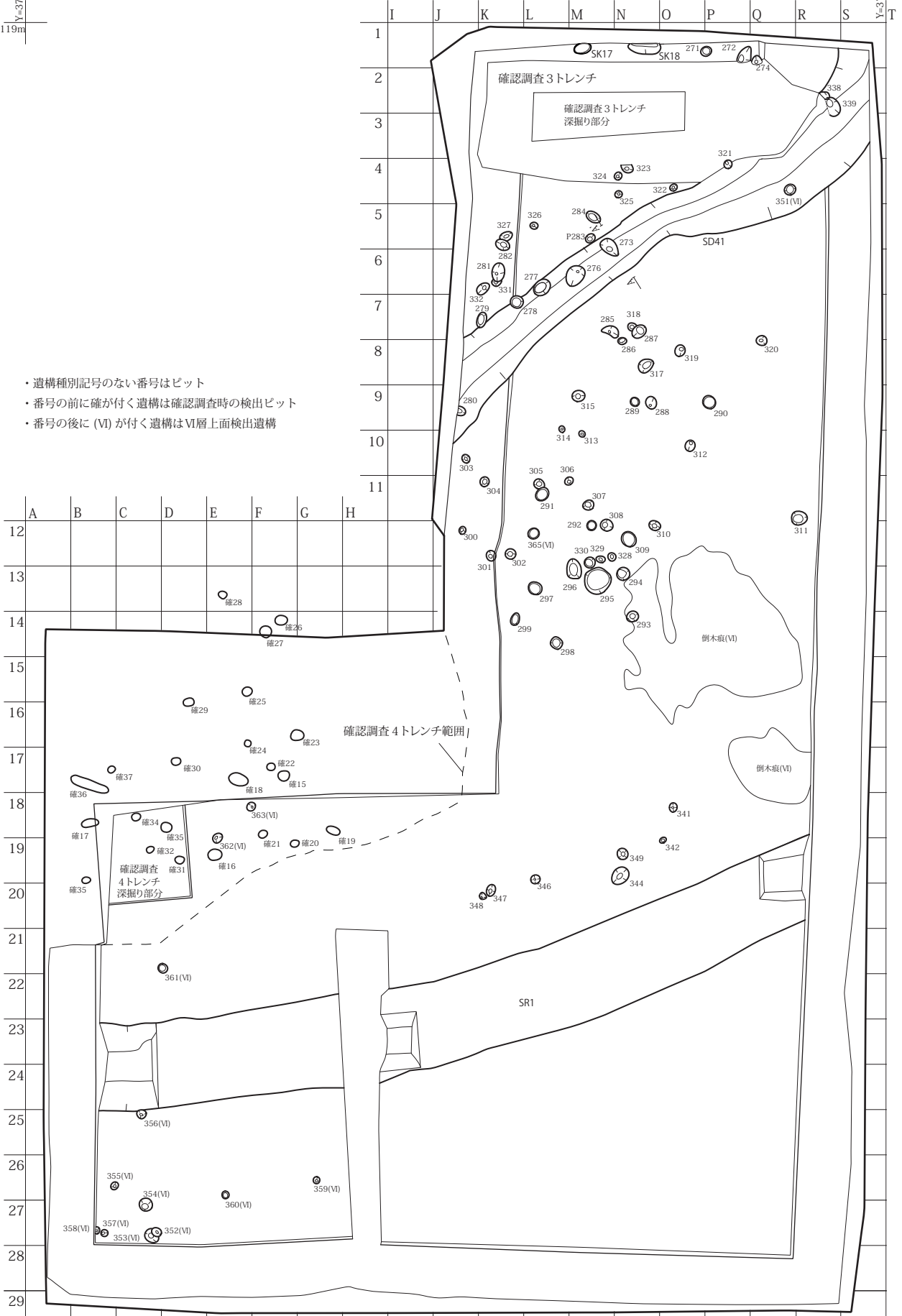
2. 土坑

SK17 土坑(第25・26図) 調査区北壁中央部で検出された土坑である。北側は調査区外に延びる。長軸50cm、

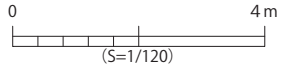
X=-198119m
Y=3772m

Y=3791m

- ・遺構種別記号のない番号はピット
- ・番号の前に確が付く遺構は確認調査時の検出ピット
- ・番号の後に (VI) が付く遺構はVI層上面検出遺構



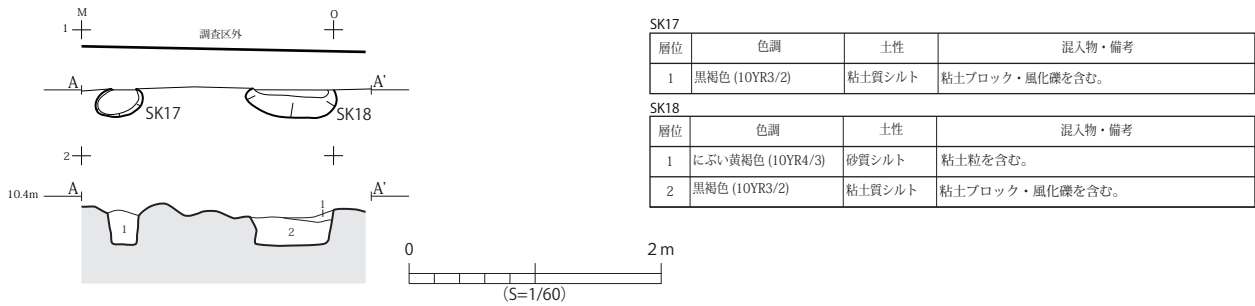
X=-198148m



第 25 図 IV・VI層上面検出遺構 遺構配置図 (1/120)

短軸 31cmの楕円形で、深さは 11cmである。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。遺物は出土していない。

SK18 土坑 (第 25・26 図) 調査区北壁中央部で検出された土坑である。北側は調査区外に延びる。平面形は長軸 75cm、短軸 24cm以上の楕円形と推定される。深さは 21cmである。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。遺物は出土していない。



第 26 図 SK17・18 土坑 平面図・土層断面図 (1/60)

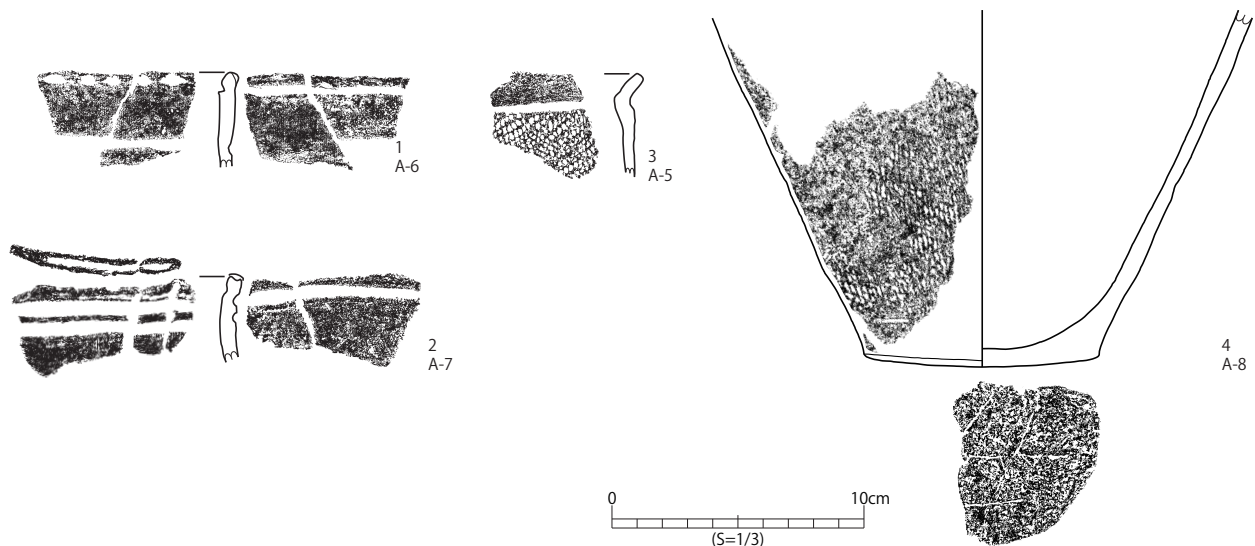
3. ピット

IV層上面では 70 のピットが検出された (第 25 図)。ピットの平面形は円形・楕円形・不整円形・不整形で一定していない。規模は長軸 15～60cm、短軸 11～57cm、深さは 4～39cmである。堆積土は全て単層であり、基本層位のⅢc層に類似している。柱根や柱痕跡は確認されなかった。このほかに確認調査時に 23 のピットを検出している。14 のピットから弥生土器片、剥片等が出土しており、P286 と P319 から出土した弥生土器片 2 点 (第 20 図 5、第 19 図 1) P283 と P288 から出土し打製石器各 1 点 (第 21 図 18・19) を図化した。弥生土器の詳細は第 3 節でまとめて報告している。

第 5 節 V層上面遺構と出土遺物

1. 自然流路跡

SR1 自然流路跡 (第 14 図) 調査区南側で検出された。検出長 11.2m で、東・西側調査区外に延びる。規模は、上端幅 100～156cm、断面形は開いた V 字状で、深さは 48cmである。方向は N - 53° - E である。3 か所にトレンチを設定し堆積状況を確認したところ、基本層のⅢc～IV層が堆積しており、層序通りの堆積が確認できたこ



図中番号	登録番号	器種	部位	出土地区	出土層位	底径	調整・特徴	写真図版
1	A-6	深鉢	口縁～体部	確認調査 3 トレンチ	V層	—	外面：口唇部→押圧 体部→沈線、ミガキ 内面：沈線、ミガキ	4-5
2	A-7	深鉢	口縁～体部	確認調査 3 トレンチ	V層	—	外面：口唇部→沈線、ミガキ、山形状突起 口縁上半：沈線、ミガキ 外面の沈線間に赤色顔料が残存、スス付着 内面：体部→沈線、ミガキ	4-6
3	A-5	深鉢	口縁～体部	確認調査 3 トレンチ	V層	—	外面：口唇部→ナデ 口縁上半→ミガキ 口縁下半→LR 縄文 内面：ナデ	4-7
4	A-8	深鉢	体～底部	確認調査 3 トレンチ	V層	(9.2)	外面：体部→擦糸文 R 底部→木葉痕 内面：ナデ、ミガキ	4-8

第 27 図 V層出土遺物

とから自然流路の痕跡と判断した。

遺物は、流入土のⅢc・d層中から弥生土器片3点、剥片2点、礫1点が出土している。弥生土器片1点(第16図12)を図化した。

2. V層出土遺物

V層からは縄文土器が112点出土している。いずれも小破片のため、図化できた資料は4点のみである(第27図1～4)。1～3は口縁部資料であり、文様は沈線文のもの(1・2)と、斜行縄文のもの(3)がある。1は口唇部に押圧文を加えている。2の口唇部には山形突起を作り、沈線文を施している。沈線内に赤色塗料が残存している。4は底部資料である。器面の文様は撚糸文Rを施している。底部の外面には木葉痕がみられる。1～3は縄文時代晩期の遺物と考えられるが、4は時期不明である。後期か晩期のいずれかと考えられる。

第6節 VI層上面遺構

ピット(第25図)

VI層上面では計14のピットが検出された。平面形は円形・楕円形・不整形円形・不整形で一定していない。規模は長軸12～34cm、短軸10～29cm、深さは6～25cmである。堆積土は全て単層であり、基本層V層に類似している。柱根や柱痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。

第6章 まとめ

1. 遺構はⅢa層上面、Ⅲb層上面、Ⅳ層上面、Ⅴ層上面、Ⅵ層上面で検出された。検出遺構は、竪穴住居跡2軒、竪穴遺構1基、溝跡35条、土坑18基、自然流路跡1条、ピット340で、遺構総数は397である。
2. Ⅲa層上面では、竪穴住居跡2軒、竪穴遺構1基、溝跡33条、土坑13基、ピット248の、計297の遺構が検出された。SI3竪穴住居跡はカマド内出土遺物により平安時代(表杉ノ入式期)の遺構と考えられる。SI2竪穴住居跡では時期を特定できる遺物は出土していないが、東側の辺がSI3竪穴住居跡の東側の辺とほぼ同一線上に並び、カマドの敷設位置も同じく北辺であることから、SI3竪穴住居跡と同時期の可能性が考えられる。SI1竪穴遺構は、時期を含め詳細は不明だが、竪穴住居跡の一部と推定される。SD40溝跡は古墳時代の遺構の可能性がある。SK13土坑は古墳時代中期(南小泉式期)、SK19土坑は平安時代と考えられる。
3. Ⅲb層上面で検出されたSK22土坑は、弥生時代後期(天王山式)の時期に属する遺構と考えられる。
4. 基本層Ⅲ層は弥生時代後期(天王山式)の遺物包含層であり、Ⅴ層は縄文時代晩期の遺物包含層である。
5. 弥生土器はⅢ層の他、各層で検出された遺構の堆積土から出土しており、天王山式期の資料が主体を占め、少量の十三塚式期の土器が混在する(第7表)。
6. 縄文土器はⅤ層およびSD41溝跡の堆積土から出土しており、時期の分かるものは晩期大洞A'式期に位置づけられる。
7. 縄文時代の遺物包含層(Ⅴ層)からは石器が出土していないことから、今回の調査で出土した石器は、すべて弥生時代のものと考えられる(第8表)。石器に用いられている石材で多用されているものは流紋岩である(第9表)。他に碧玉、珪化凝灰岩がある程度用いられているが、圧倒的に流紋岩が多い。

<引用・参考文献>

氏家典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会

石器技術研究会 2004『石器づくりの実験考古学』学生社

仙台市教育委員会・宮城県道路公社 1984『山口遺跡Ⅱ-仙台市体育館建設予定地』仙台市文化財発掘調査報告書第61集

仙台市教育委員会・みやぎ生活協同組合 1988『下ノ内浦遺跡-みやぎ生活協同組合店舗建設に伴う発掘調査報告書-』仙台市文化財調査報告書第115集

- 仙台市教育委員会 1993 『下ノ内浦遺跡―第4次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第173集
- 仙台市教育委員会 1995 『下ノ内浦遺跡―第5次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第202集
- 仙台市教育委員会 1996 『下ノ内浦・山口遺跡―仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書V』 仙台市文化財調査報告書第207集
- 仙台市教育委員会 1997 「下ノ内浦遺跡第6次発掘調査」 『小鶴城跡ほか発掘調査報告書』 仙台文化財調査報告書第261集
- 仙台市教育委員会 2000 『高田B遺跡』 仙台市文化財調査報告書第242集
- 仙台市史編さん委員会 1995 『仙台市史特別編2考古資料』 仙台市
- 東海埋蔵文化財研究会 1991 『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』 第三分冊 関東・中央高地篇
- 日本考古学協会 2001 『亀ヶ岡文化―集落とその実態―晩期遺構集成II』
- 弥生時代研究会 1990 『「天王山式期をめぐって」の検討会 記録集』

第1表 IIIa層上面検出遺構 SI1 堅穴遺構, SI2・3 堅穴住居跡 計測表

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方位	長辺(m)×短辺(m)×深さ(cm)	カマド	床面	周溝	柱穴	掘り方	時期
SI1	N~R-27~29	(方形)	N-25°-W	3.11以上×1.15以上×27	なし	平坦	なし	なし	なし	不明
SI2	L~O-19~22	方形	N-3°-E	3.02×2.52×10	あり	平坦	あり	4基	あり	(平安)
SI3	K~O-10~15	方形	N-5°-E	3.61×3.30×14	あり	平坦	あり	6基	あり	平安

平面形の()内は現存部分からの推定 時期の()内は可能性

第2表 IIIa層上面検出遺構 SD1~40 溝跡 計測表

遺構番号	グリッド	方向	全長(m)×上端幅(m)×深さ(cm)	断面形	出土遺物	時期
SD1	E~G-22~28	N-16°-W	6.03以上×0.35×12	逆台形	弥生土器6点、珪化木1点	近世以降
SD2	G~R-22~29	W-27°-N	13.32以上×0.64×16	開いたU字状	弥生土器30点、調整不明土師器3点、尖頭器1点(21図10)、剥片1点	近世以降
SD3	J~S-14~16	E-9°-N	9.50以上×0.26×32	逆台形	弥生土器5点、木製品1点、石鏝未製品1点(21図5)、打製石器1点、剥片2点、礫1点	近世以降
SD4	S-3・4	N-34°-W	0.68×0.27×11	逆台形		近世以降
SD5	R・S-4・5	N-31°-W	1.07×0.26×6	逆台形		近世以降
SD6	R・S-4~6	N-35°-W	1.67×0.33×9	逆台形	弥生土器1点	近世以降
SD7	欠番					
SD8	Q-5・6	N-45°-W	1.26×0.26×8	逆台形		近世以降
SD9	P~R-5~7	N-40°-W	2.47×0.25×10	逆台形	弥生土器1点	近世以降
SD10	O-5・6	N-35°-W	0.84×0.18×5	逆台形		近世以降
SD11	N・O-5・6	N-31°-W	1.14×0.17×5	逆台形	弥生土器3点	近世以降
SD12	N・O-6・7	N-22°-W	1.60×0.21×7	逆台形	弥生土器5点、石鏝1点(21図12)	近世以降
SD13	M-6	N-18°-W	1.00×0.27×9	逆台形	弥生土器2点	近世以降
SD14	L・M-6	N-15°-W	0.81×0.32×8	逆台形	弥生土器7点	近世以降
SD15	欠番					
SD16	K・L-7・8	E-23°-N	1.52×0.42×9	逆台形	弥生土器3点	近世以降
SD17	J・K-8	E-26°-N	0.56以上×0.19×8	逆台形		近世以降
SD18	J・K-7~9	N-35°-W	1.45×0.15×6	逆台形		近世以降
SD19	R・S-7~9	N-27°-W	1.75以上×0.40×10	掃鉢状	弥生土器1点	近世以降
SD20	S-7・8	N-21°-W	0.58以上×0.26以上×9	逆台形		近世以降
SD21	欠番					
SD22	B・C-22~25	N-29°-W	2.68×0.30×14	逆台形	弥生土器2点、調整不明土師器2点	近世以降
SD23	B・C-21~23	N-28°-W	2.03×0.42×12	逆台形	弥生土器3点、非口クロ土師器4点、調整不明土師器2点	近世以降
SD24	J~S-3~7	E-15°-N	9.35以上×0.47×8	逆台形	弥生土器60点、調整不明土師器1点、石鏝1点(21図4)、石鏝1点(21図13)、打製石器3点(21図20)、剥片6点、礫1点	近世以降
SD25	J~S-6~7	E-7°-N	9.00以上×0.21~1.03×2~9	逆台形	弥生土器35点、調整不明土師器2点、打製石器1点、剥片2点	近世以降
SD26	J~S-6~10	E-18°-N	9.62以上×0.50×8	逆台形	弥生土器143点、非口クロ土師器3点、調整不明土師器2点、石鏝1点、尖頭器1点(21図9)石鏝1点(21図14)、打製石器4点(21図17)、剥片12点	近世以降
SD27	M-7・8	N-33°-W	0.95×0.18×7	逆台形	弥生土器1点	近世以降
SD28	R・S-10	E-34°-N	1.29以上×0.22×8	逆台形	弥生土器3点	近世以降
SD29	Q~S-8~12	N-16°-W	4.81以上×0.27×4	逆台形		近世以降
SD30	H・I-24	W-23°-N	0.65以上×0.13×5	逆台形		近世以降
SD31	欠番					
SD32	欠番					
SD33	K・L-26	W-18°-N	1.14×0.17×5	逆台形		近世以降
SD34	I・J-25	E-17°-N	1.43×0.35×8	逆台形		近世以降
SD35	C・D-28・29	E-19°-N	1.00×0.31×11	逆台形		近世以降
SD36	欠番					
SD37	欠番					
SD38	K・L-5・6	E-24°-N	1.50×0.23×10	逆台形	弥生土器2点	近世以降
SD39	A~C-27~29	W-30°-N	2.31以上×0.49×20	逆台形	弥生土器3点	近世以降
SD40	A~S-25~28	E-8°-N	17.81以上×0.63×25	開いたU字状	弥生土器179点、打製石器2点、剥片3点	古墳以降

第8表 層位・遺構別出土石器数量表

種別	出土地点																				表採	合計														
	IIIa層上面	IIIa層	IIIb層	IIIc層	IIId層	V層	SI1	SI2	SI3	SD1	SD2	SD3	SD12	SD24	SD25	SD26	SD40	SK1	SK2	SK3			SK7	SK15	SK19	SK22	P104	P143	P169	P184	P273	P283	P288	P317		
打製石器	アメリカ式石鏃		3																																	3
	石鏃	2	3	1										1		1																			8	
	石鏃未製品		1	1	4							1						1																	8	
	ピエス・エスキーユ	1	2																																3	
	尖頭器					1					1						1																		3	
	石錐		3											1	1		1																		6	
	石鋸	1																																	1	
	二次加工痕を有する剥片	4	10	8	3				1				1		1		2			1											1				32	
	二次加工痕と微細剥離痕を有する剥片	1		1																															2	
	微細剥離痕を有する剥片	2	16	7	7	2				1					2	1	2	2					1									1			44	
剥片	22	91	20	22	12			1	3		1	2		6	2	12	3							1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	206	
石核								1																										1		
磨製石斧																						1												1		
礫石器	礫石器			1	2																													3		
	石皿		1																															1		
	砥石		2		1																													3		
礫	3	3	1	3		2	1		1	1	1	1		1						1											1		1	24		
合計	36	135	40	42	15	2	1	3	5	1	2	5	1	12	3	19	5	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1	4	349	

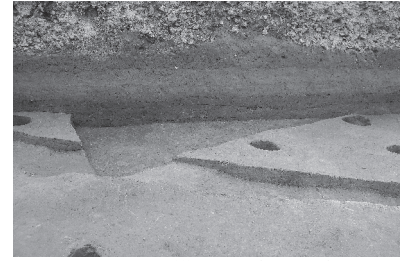
第9表 石材別出土石器数量表

器種	打製石器												磨製石斧	礫石器				合計																
	アメリカ式石鏃	石鏃	石鏃未製品	ピエス・エスキーユ	尖頭器	石錐	石鋸	二次加工痕を有する剥片	二次加工痕と微細剥離痕を有する剥片	微細剥離痕を有する剥片	剥片	石核		礫石器	石皿	砥石	礫																	
角閃石デイスait																																	2	2
玉鏃	2						1							1	3																			7
珪化凝灰岩				1					1					4	16																		1	23
珪化木				1																													6	7
珪質頁岩												1			6																			8
頁岩											1				14																		1	17
黒曜岩																																		15
デイスait																										1							7	12
デイスait軽石																																	4	4
デイスait質凝灰岩																																	3	10
デイスait質砂岩																									2	1								3
粘板岩																																	3	3
碧玉		1	1										4	1	6	35																		48
流紋岩	1	7	7	1	3	5							25	1	26	106																		182
流紋岩質凝灰岩													1		1	4	1																	7
緑泥石片岩																								1										1
合計	3	8	8	3	3	6	1						32	2	44	206	1							1	1	3	1	3	24				349	

写真図版



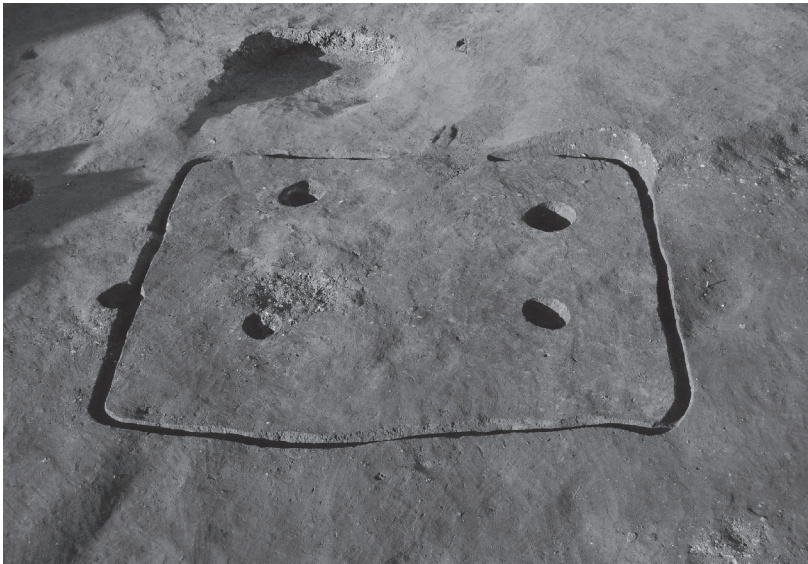
SI1 竪穴遺構 完掘全景 (北西から)



SI1 竪穴遺構 断面 (北から)



SI2 竪穴住居跡 カマド 検出状況 (南から)



SI2 竪穴住居跡 完掘全景 (南から)



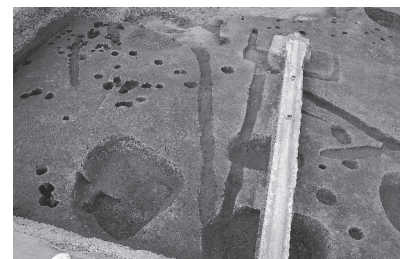
SI2 竪穴住居跡 掘り方 断面 (南から)



SI3 竪穴住居跡 カマド (南から)



SI3 竪穴住居跡 完掘全景 (南から)



SD1 溝跡 完掘全景 (南から)



SD2 溝跡 完掘全景 (南東から)



SD3 溝跡 完掘全景 (西から)



IIIa 上面北側 溝跡群 完掘状況 (南から)



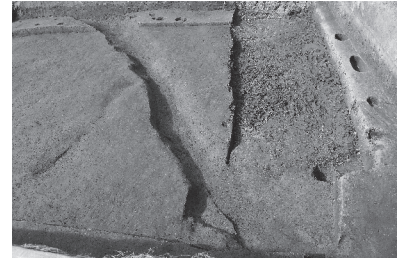
SD10・11 溝跡 断面 (南から)



SD20 溝跡 完掘全景 (南東から)



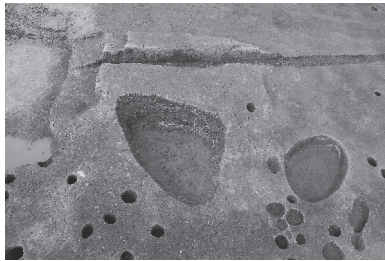
SD40 溝跡 完掘全景 (西から)



SD41 溝跡 完掘全景 (西から)



SK1・2・5・6 土坑完掘全景 (南から)



SK3・4 土坑 完掘全景 (南から)



SK11 土坑 完掘全景 (北西から)



SK13 土坑 断面 (北西から)



SK13 土坑 完掘全景 (北西から)



SK17 土坑 完掘全景 (南から)



SK18 土坑 完掘全景 (南から)

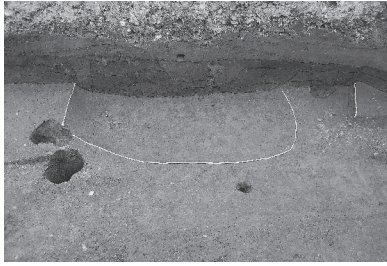


SK19 土坑 検出状況 (東から)

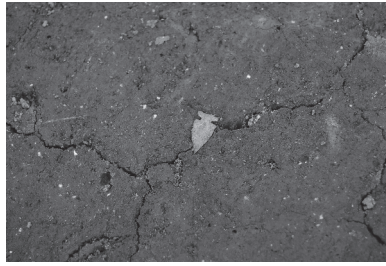


SK22 土坑 遺物出土状況 (北から)

写真図版 2



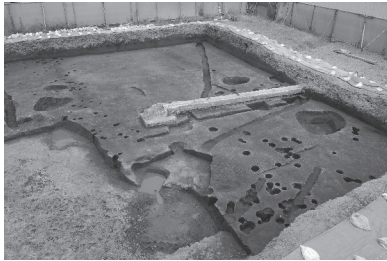
SK16・22土坑 完掘全景 (北から)



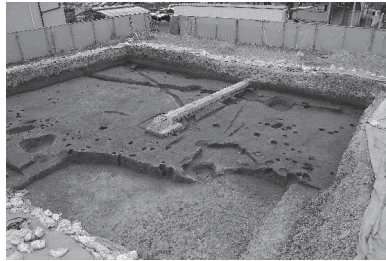
IIIa層アメリカ式石鏟 (Ka-8)
出土状況 (南から)



IIIa層上面北側 完掘状況 (西から)



IIIa層上面南側 完掘状況 (北西から)



IIIb層上面南側 完掘状況 (北西から)



IIIb層上面北側 完掘状況 (南西から)



IIIc層上面北側 完掘状況 (南から)



IIIc層上面南側 完掘状況 (北西から)



IIId層上面北側 完掘状況 (南から)



IV層上面北側 完掘状況 (南から)



IV層上面南西側 完掘状況 (南から)



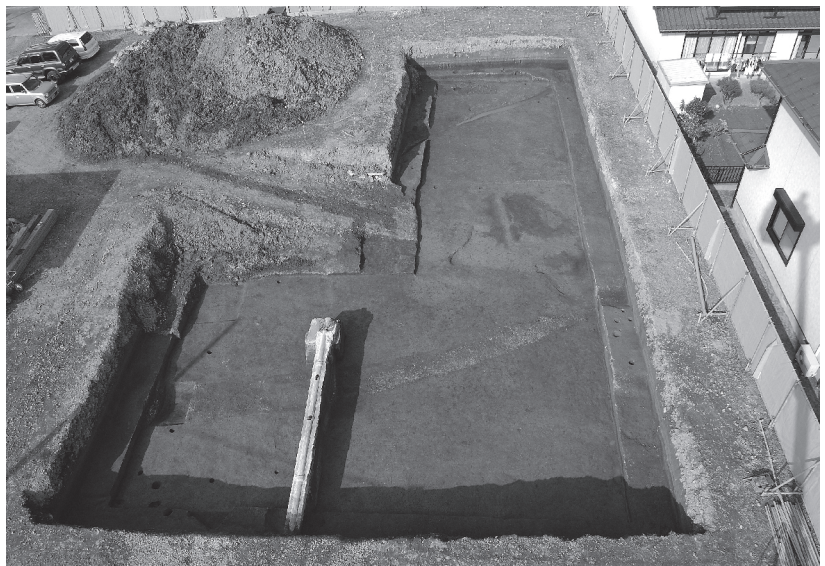
IV層上面南東側 完掘状況 (東から)



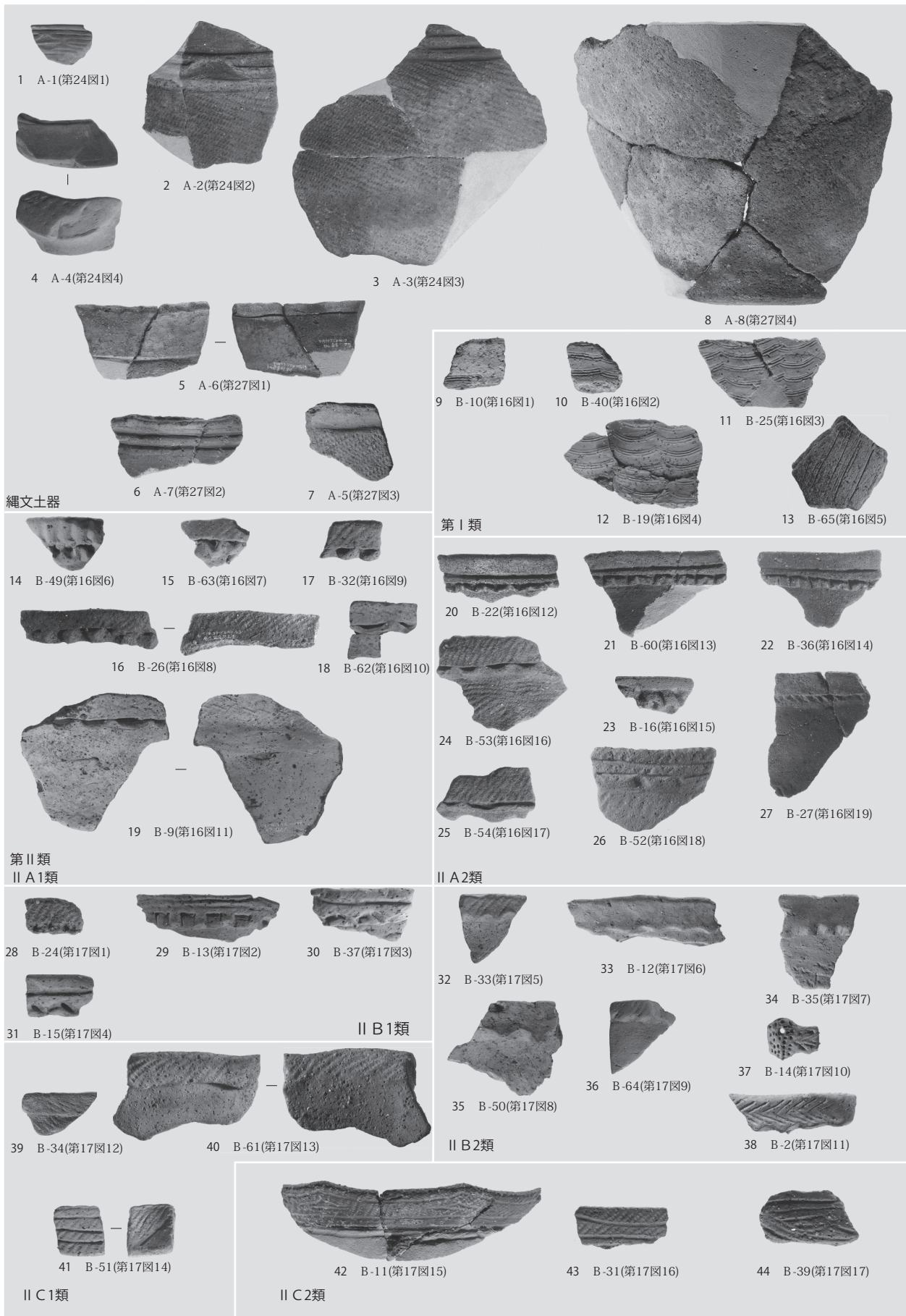
V層上面北側 完掘状況 (北から)



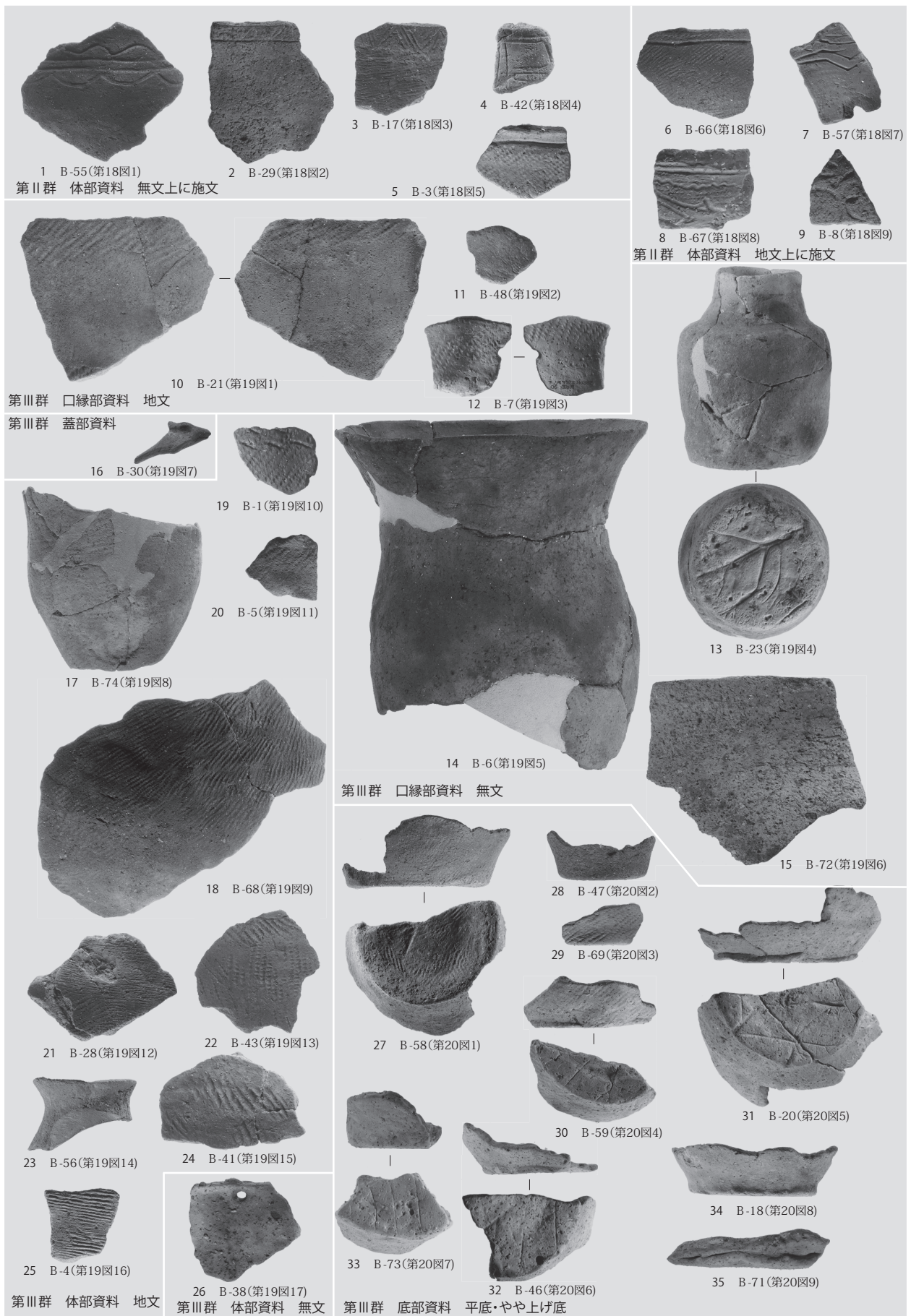
北壁断面 (南から)



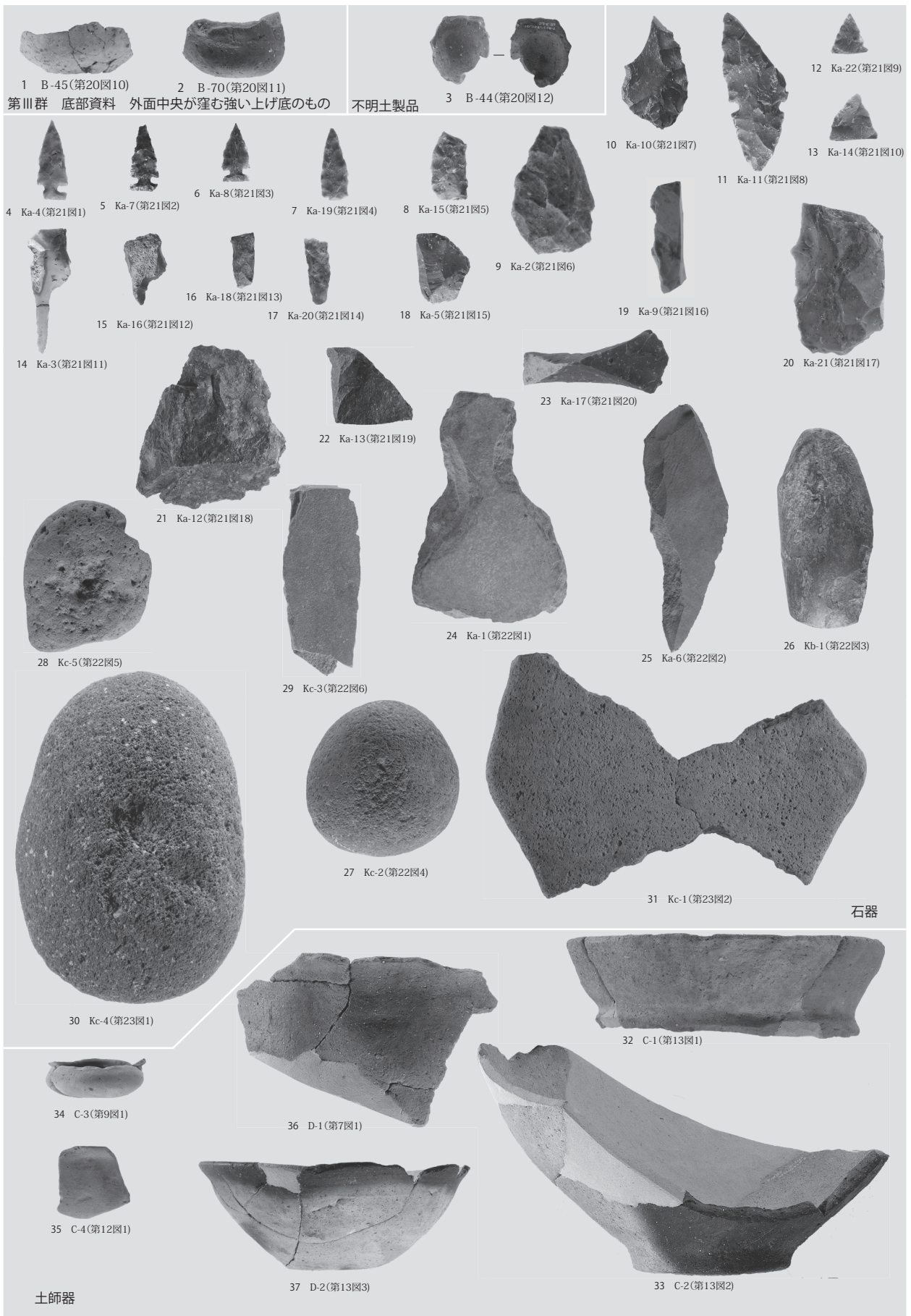
VI層上面完掘全景 (南から)



写真図版 4(1 ~ 45 : 約 1/3)



写真図版5(1~35:約1/3)



写真図版6(1~20:約1/2, 21~33:約1/3)

報告書抄録

ふりがな	しものうちうらいせき							
書名	下ノ内浦遺跡							
副書名	第7次発掘調査報告書							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第367集							
編著者名	荒井格・熊谷敏哉・三澤壮太・百瀬貴子							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区二日町1番1号 電話 022-214-8894							
発行年月日	2010年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
しものうちうらいせき 下ノ内浦遺跡	せんだいしらいはくくながまちなみ 仙台市太白区長町南 四丁目29-3・6・7	41009	01368	38° 12' 53"	140° 52' 35"	20090819 、 20091030	399 m ²	共同住宅建築工事に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
しものうちうらいせき 下ノ内浦遺跡	包含層 集落跡	縄文 弥生 古墳 平安	竪穴住居跡 溝跡 土坑 ピット	縄文土器 弥生土器 土師器 石器・石製品		縄文時代と弥生時代の遺物包含層、 弥生時代及びそれ以降の土坑、平 安時代の竪穴住居跡、近世以降の 多数の溝・ピットを発見した。		
要約	<p>下ノ内浦遺跡は仙台市太白区長町南に所在する。遺跡は名取川と広瀬川にはさまれた「郡山低地」と呼ばれる地域にあたり、名取川と笹川の洪水堆積物によって形成された自然堤防上に立地する。調査地点は遺跡範囲の中央北寄りに位置する。</p> <p>発掘調査の結果、竪穴住居跡2軒、竪穴遺構1基、溝跡35条、土坑18基、自然流路跡1条、ピット340が発見された。また、縄文時代と弥生時代の遺物包含層も確認された。出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、石器である。竪穴住居跡の1軒は平安時代で、もう1軒は同時期の可能性が考えられる。弥生時代の土坑は1基確認されている。遺物包含層はそれぞれ縄文時代晩期と弥生時代後期のものである。</p>							

仙台市文化財調査報告書第367集

下ノ内浦遺跡

第7次発掘調査報告書

2010年3月

発行 仙台市教育委員会

〒980-8671 仙台市青葉区二日町1番1号

文化財課 022(214)8894

印刷 今野印刷株式会社

〒984-0011 仙台市若林区六丁の目西町2-10

022(288)6123

